
アルナートの魔女

Monyu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルナートの魔女

【Nコード】

N5525W

【作者名】

Monyu

【あらすじ】

アルナート領にある湖のほとりに捨てられていたところを、領主夫人に拾われて、田舎貴族の一人娘として育てられる。前世の記憶を持って生まれた少女の体に宿す魔力は皆無だった。しかし、少女は魔術、精霊魔法に対して膨大な知識を持っており、それゆえに「アルナートの魔女」と呼ばれるようになった。その通り名のせいで、世界を賭けた厄介事に巻き込まれるお話。

プロローグ

王族特有の金髪がさらりとゆれる。深い青い瞳は今は伏せられていて、

伺うことができない。

「何でもする。頼む。娘を探しだしてくれ」

瞳を伺うことができなくとも、その声から真剣さが伝わってくる。

目の前で片膝を床につけ、頭を垂れているこの人は、「王様」である。

「わかりました」

と、小さくため息をつき、諦めたように少女は言った。

「すまない。感謝する」

どこまでも上から目線なのは、気に食わないが、了承した後にあげた顔が、

涙目だったので許すことにした。それにしてもついてない。

がっぱり謝礼をもらったら、速攻で帰るつもりだったのになあ。

まあ、これが公の謁見じゃなかったただけよかったかな。

煌びやかな部屋にある今は亡き王妃の肖像画が幸せそうに微笑んでいた。

いつもの朝

王都から遠く離れた山に囲まれた小さな領地、アルナート領、別名「陸の孤島」で

ある。特に名産もないこの領地は、ここ数年であつという間に有名になった。

その原因は、「アルナートの魔女」である。決して魔法が珍しい世界ではなく、

その魔女が風変りなせいだ。魔女には魔力がない。

魔力がないのに、様々な魔法をいとも簡単に使用する。

特に時空間に関する魔法に関しては、彼女に勝るものはいないだろう。

4

「ねえ、お父さん。どうしても今日、その使者に会わなきゃダメ？」

無造作に束ねられた漆黒の髪を持ち、面倒そうに顔ゆがめている少女、

ソフィアージュが噂の「アルナートの魔女」だ。

「ソフィ、そんな顔してはせっかくの可愛いお顔がだいなしよ」

侍女のヘレンと朝食を机に並べていた母、フランが口をはさむ。きれいに伸びた

銀髪は腰まであり、深緑の瞳が柔らかな雰囲気醸し出している。

「ごめん。お母さん。いまお父さんと話してるから」

何かと容姿に関してうるさい母に、これ以上話が面倒な方向に持っていく行かない

ように、釘をさしておく。父、ブライトの方に向き直り、再び同じ質問をする。

「本当に、どうしても会わなきゃダメ？出来れば結界でも張って避けたいぐらいな

んだけど」

実際にこの領地には、結界がはってある。名産品も特にないこの田舎領地には

決まった商人しか訪れない。それゆえソフィアージュは、例外を除いて領地の部

外者には、領地に立ち入れないようにしていた。もちろん、両親には内緒である。

そのため、結界に使者の情報をたすのが非常に面倒であるとは、言えない。

「ソフィ、これは王からの命令なんだ。そのようなことをすれば、
反逆罪に問われてもおかしくない」

こげ茶の髪に一瞬赤と見間違えるほどの明るい茶の瞳を持つ父。

その瞳には有無を言わせない力があつた。父の返答を予想していたわけではな

いが、やはりそうなのかと落ち込む。

「分かつたわ。じゃあ、今日の午後に会います」

諦めたように言ったソフィアージュは、約束の時間までに、どうやって結界の修正

をするかを考えていた。

魔方陣を書きなおす時間はないしなあ。とりあえず、一時的に結界をなくすのが

一番早いかな。でも、使者がいる間ずっと結界がないのは、心もとないなあ。

とりあえず、「悪意」をもったものから守る簡易結界に切り替えよう。それなら、5

分もあればすぐだし。使者の容姿とか魔力の情報があれば、魔方陣の書き換え

の方が早いんだけど、感のいいお父さんのことだからばれそうだなあ。そういえ

ば、お父さんが読んでた手紙って、公的な手紙と違って、役所通したしるしの董

のハンがなかったような。でも、王家の紋章はついてたよね？あれっ？

「ねえ、お父さん。お父さんのところに来た手紙って、私的な手紙だよな？」

「ああ」

「なんで、お父さんに陛下から私的な手紙が届くの？」

ソフィアージュの質問に、ブライトは嫌な汗が背中をなでるのを感じた。

ソフィに自分が王の従弟にあたるということは、話していなかった。

その必要もなかったし、何より王族の権力争いに巻き込みたくなかった。

今回の手紙を読んでいるところをソフィアージュに見つからなければ、

公的な手紙として説明をしたらどう。

「それは、私がお答えします。お嬢様」

いつの間にか朝食の準備が整い、紅茶を入れていた執事のゴルバが話に加

わった。白髪交じりの黒髪に深い緑の瞳は、落ち着いた雰囲気を持っている。

ゴルバの話を要約すると、お父様は昔、陛下の教育係、としてついでいたら

い。まあ、歳が近いから”お友達”として配属されただろう。それなら、仲が良く

てもおかしくないかなあ。でも、何だかひっかかるんだよなー。そもそも何で

父本人がそれを答えないんだろう。まるで、ゴルバお父様に助け船をだしたみた

いだ。それに、何の権力もない父が教育係に選ばれたんだろう？

「ソフィ、朝食がさめてしまっわ。早く食べなさい」

うんうんと唸っていたソフィアージュは、フランに促され朝食に手をつけた。

ヘレンの作った朝食に舌鼓を打つ。

うーん。おいしい。

「ご飯のおいしさに当初の疑問をすっかり忘れてしまったソフィア―
ジュであった。」

最低限の身だしなみ

朝食を済ませたソフィアージュは、母、フランと侍女のヘレンにかまっていた。

「本当にソフィはおしゃれに興味がないんだから」

既に40過ぎとは思えない美貌をもった母が、年甲斐もなくぷんぷんと怒っている。

普段はお淑やかで決して前に出ない母だが、ソフィアージュのおしゃれに関

してだけは口うるさかった。ソフィアージュはおしゃれに興味がなく、実用性を求

めた服を好む。それだけならまだしも、父、ブライトは、最低限の身だしなみがで

きればいいたろうと、フランの文句を適当に流していた。それゆえに、フランは普

段はあまり強く言えなかった。しかし、今は王都から使者がくるため、最低限の

身だしなみ”という大義名分を使って、ソフィアージュを着飾ることが出来る。

そのため、フランは朝から張り切っていた。

「まったくです。フラン様がお嬢様の歳のころには、このヘレンがよりをかけて、ド

レスを作ったものです」

幼少のころからフランの専属侍女としてついていたヘレンは、自慢げに話した。

ヘレンの話にうなずき、昔話に花を咲かせるフランとヘレン。しかし、その手は、

忙しそうに動いている。半ばあきらめたように立っているソフィアーージュに、

次々とドレスをあわせては、これは地味だとか、派手すぎるとか、言っている。

この”最低限の身だしなみ”は、いつ終わるのだろうか。

こっそりため息をつく。

頼むから、早く終わって！！

ソフィアーージュの切なる願いが叶うのは、その2時間後だった。

フランとヘレンからやっとのことで解放されたソフィアーージュは、疲れ果てていた。

本来なら、すぐにでも簡易結界の作成に取り掛からなければいけな

いが、今の

状態ではとても集中することができそうにない。一度、休憩しよう
と、ベットに行く

うとして、足がとまる。朝食を食べ終わるまでのラフな格好ではな
い。少しの癖の

ある黒髪はきれいに結びあげられ、その髪には、品の良いガーネッ
トの髪飾りが

ついている。落ち着いたオレンジのドレスには、これまた品の良い
こげ茶のレー

スがふんだんに使用されている。自分で選んだとは言え、18歳の
私には少し大

人っぽい気がする。しかし、あのまま好きにさせていたら、恐ろし
く妖艶な雰

囲気な漂う紫のドレスとか、これでもかというくらいにフリルが使
用されているピン

クのドレスとか着せられかねなかった。

はあ。と大きなため息をつく。

ソフィアージュは、ベットで寝ることをあきらめ、来客者を招くた
めに用意されてい

るゆったりとした椅子に座り、居眠りをすることにした。

少しぐらい皺になったっていいよね。あとで簡単に直せるし。

夢

真っ白で何も無い。

流れに身を任せてふわふわと流れていく。

ああ、終わったんだ。

と思った、と同時に

終わって、また始まるんだ。

とも思った。その瞬間、目の前には、新緑の瞳がこちらを覗いていた。

周りにある木々の葉と同じ色。

まだ昇りきららない緩やかな太陽の光できらきらと銀色の髪が光っている。

ああ、この人はお母さんだ。

ズキンと鋭い痛みが走った。

がばつと勢いよく背もたれから体を放すと、すぐ前にある机にお腹を打つ。

「~~~~~つつた」

痛みあまり声にならない。静かに痛みが治まるの待つ。

痛みが治まるのと同時に、少しずつ頭が覚醒していく。

また、この世界に来た時の夢をみた。ここ最近、ずっと見ている。前世の記憶。

”寺島 聡”と言う名で、一般的な女性として暮らしていた。その人生は、地震

による電車の転倒事故で終わりを迎えている。そして、夢にもあったように何もな

い空間をふわふわとさまよい、いつの間にか母に抱かれていた。そう、私は、こ

の館の近くにある湖のほとりで拾われたのだ。両親はそのことを一切言わず、実

の子として育てているみたいだけど、生まれたときから、26歳の聡の記憶がある

せいで、この世界での18年間の記憶が大人並みに詳細に記憶されている。

まあ、血のつながりに関係なく、彼らは確かに私の両親だから、何の問題もない

けどね。ふと、鏡に視線をもっていくと、そこにはオレンジのドレスを着た少女が

写っている。ああ、そうだ。母とヘレンに着せ替え人形のごとく弄ばれたんだっ

け。椅子に寄りかかって寝ていたせいで、髪が乱れている。立ち上がってみると

ドレスにもところどころ皺がついてしまっている。目を瞑り、神経を集中させて、眠

る前の自分の姿を思い出す。ソフィアージュの体を薄い膜のような光が包む。乱

れていた髪は、時間を逆再生したようにみるみる変化していき、整っていく。同様

にして、ドレスの皺も直っていった。

うん、大丈夫だね。

きちんとした格好に戻ったことを確認して、不意に思い出す。

そう言えば、使者がくるための身だしなみなんだよね……。

冷やりとした汗が流れる。

焦る気持ちを抑えながら、時計で時間を確認する。

木造式の何の装飾もない質素な時計の針は、15時を指していた。

結界そのままだっ！！！！！！

時計の時間に軽くパニック状態になるソフィアーヂュ。

急いで簡易結界を作ろうと勉強机の紙を取ろうとした時、

コンコン

と、ノックの音がした。

「お嬢様。失礼します」

返事を待たずに扉が開く。

「使者が到着いたしました」

「へっ…、ほえ？」

使者は領地に踏み入ることができないと思っていたソフィアーヂュは、かなり間拔

けな声を出していた。

「使者が到着いたしました」

ゴルバもう一度同じことを言い、ソフィアーヂュを使者がいる客間まで案内した。

移動の最中ソフィアーヂュは、ずっと考えていた。

なんで、結界が貼ってある状態で使者がここまで尋ねることができたのだろうか？

その疑問は、使者に会うことで解消された。

使者

「失礼いたします。お嬢様をお連れいたしました」

客間についたゴルバは、一礼をして一步後ろに下がる。

「お待たせして申し訳ありません。ソフィアージュ・アルナートと申します。

以後お見知りおきを」

ドレスの裾を軽くつまみ、膝を曲げて、遅れたことを詫げる。

「はじめまして。ソフィアージュ。私は、ヴァンペール・フォーワード・デステンブル

クダ。年頃の女性というものは、準備に時間がかかるものだろう。気にしなくても

いい」

デステンブルク？どっかで聞いたことあるような。。。

顔をあげ、声の主をみて、驚愕する。

王族特有の金髪に蒼の瞳。スツと通った鼻に形の好い眉に口。

中性的な美形だ。

ああ、デステンブルクって王の直系の家系じゃん。

この美形は、確か第一皇子で、側室の子だから王位第二継承者だったはず。

なんだってこんな偉い人がこの田舎領地に一体なんの用なんだ？

お父さんは使者が来ること以外は特に何も言っていなかったし。

「ああ、それと私の後ろに立っているのが騎士のトーマスだ」

視線を美形の後ろに移すと、深紅の瞳が印象的な精悍な体格のおっさんがたっ

ていた。騎士って言うより傭兵といった感じがしないでもない。

おっさん騎士と視線が合うと、にやりと笑った。

うん。この人苦手かも。

「とりあえず、座ろうか」

ニコリと笑い席に勧める美形。

「はい」

内心、ここは私の家なんですけど、とか思っていたが、

口では素直に返事をしておく。

促されて席を座り、違和感を覚える。

この客間には、母フランも父ブライトもない。それなのに、この部屋からは、

父に酷似した魔力を感じる。しかもその魔力の元が目の前のヴァンペールだ。

どういうこと？

結界が反応せず領地に踏み込めたのは、この父に似た魔力のせいだとして、な

んでここまで似ているのか。魔力は血に宿るもの。同じような血が流れているっ

てこと？でも、それって……。

素直に席に着いてから、何やらいづらそうにしていると思ったら、いきなりうんう

ん唸ったり、何か思いついたような、納得言っただような表情になったりと、ひとり百

面相をしているソフィアージュ。そんなソフィアージュを何も言わずに頬づえをつ

いて楽しそうに眺めていたヴァンペール。

いつまでたっても終わりそうにないので、仕方なくヴァンペールは

口を開く。

「君の百面相をみるのもなかなか楽しいものだけど、出来れば話を進めたい

な」

その一言に、今の状況を思い出したソフィアージュ。

いけない。気になることが多すぎて、考えることに夢中になってしまった。

なんとか、笑顔を取り繕い詫びる。

「申し訳ありません。緊張のあまり我を忘れてしまいました」

もちろん、嘘だ。

「構わないよ。なかなか面白かったから」

私の百面相がそんなに面白かったか。確かにきれいな顔立ちではないが、そん

なに言われるほど不細工でもない。いくら王族だっていったって、失礼だ。

「いきなり本題で申し訳ないのですが、ご用件は一体何でしょうか」

「ああ、手紙にも書いていなかったな。ただ、噂の魔女に会ってみかっただけな

んだ」

はあっと思わず声が出そうになるのをすんでのところで堪えた。しかし、作ってい

た笑顔がヒクついていた。

「そうですか。それで、会ってみてのご感想は？」

これだから貴族は嫌いなんだ、と曲がりなりにも自分も貴族であることを棚に

上げて心の中で毒づいた。

「ああ。噂になるだけの魔女であることは、確かだ。全く君から魔力を感じない

のに、領地に張ってあった結界の気配は確かに君のものだし、あの結界は良

くできている。かなりてこずったよ」

何でもない事のように淡々と述べるヴァンペールに確実に苦手意識を抱いてい

くソフィアージュ。

「でも、最終的にはかなり単純な方法で入れたな。結界を作成したキミならわか

るだろう?。」

蒼い瞳が面白そうに細められる。

「ヴァンペール殿下が先頭に立って歩く、ですね」

面倒くさいと感じたが、求められた答えを返す。

「そのとおり。君は、魔力で領地に侵入させるかどうかを判断していた。そして私

の魔力が君の父上に酷似しているために、結界が誤認識して私を領地に侵入さ

せた。と、ここまでではわかるんだが、何故、私の護衛たちも一緒に入れたんだ?

それに、庶民は決して魔力が高くない。どうやって判別しているんだ?」

王族の魔力は強いと聞いていたが、まさか結界の原理を一部と言え認識できる

程度とは、驚きだ。

「魔力は何も人間に限られたものではありません。木、土、水、火、風、等の自然

にも魔力は存在します。そして、この領地という空間を形成してい

る全ての自然

の魔力を統合し、認識することによってアルナート領であることを判別します。そ

して、その領地に長く住む人の魔力もアルナート領を形成しているものの一つで

す。そのため、領民を判別することは、難しくありません。次に、ヴァンペール殿

下の護衛と一緒に領地に入れた理由ですが、これも似たような理由です。人間

の魔力の根源は血ですが、その人の性格は後天的な環境によって形成され、そ

れによって少しではありますが、魔力の質が変わります。そして、その性格を形

成するためにほんの少しでも関わりがあれば、その人はヴァンペール殿下の

一部として認識されます。ただし、ヴァンペール殿下が拒否をすれば、たとえ性

格形成に強く関わっていたとしても、その人はヴァンペール殿下の一部と認識さ

れず、敵対関係として認識されます」

素直に答える必要はないのだが、こういったことに興味をもたれるのは新鮮で、

正直なところ嬉しかったので、つい答えてしまった。

「なるほど」

ヴァンペールは得心いったという風に、返事をする。それから、少し考えるように

顎に手をあててさすっていたが、不意に動きが止まった。

「ソフィアージュ」

先程までの柔和な雰囲気は消え、蒼の瞳にまっすぐと見つめられる。

「一緒に王城に来てくれないか？会わせたい人がいるんだ」

突然の申し出であった。

ソフィアージュの黒髪は、夕日の光を吸収し、静かに光っている。

会わせたい人

突然の申し出に逡巡するソフィアージュ。

「会ってくれるだけでいい。報酬も出す」

”報酬”という言葉に、心が動く。もともと貧しい領地だが、去年、今年と冷夏で作

物の出来が良くなり、財政的には苦しかった。ある程度の備蓄があるとはいえ、

領民に苦しい生活を強いているのに変わりはない。それに、冷夏一つでこんなに

苦しくなるのは、問題である。何かしらの対策を立てる必要がある。しかし、その

対策を立てるにしても、先立つものがなければ、実行不可能である。少しでも収

入があれば、対策を立てられるかもしれない。

「あの、卑しい質問で申し訳ないんですけど、報酬はどのくらい頂けますか？」

少しでも領民の両親の苦勞を取り除けたら、そう思うと尋ねずにはいられなかつ

た。ソフィアージュの質問にヴァンペールは、にこりと笑った。

「言い値で構わない」

その返答にソフィアージュは、飛びつくように返事をした。

「お受けします」

一通りの話を終え、ブライトの書斎で内容を報告する。

「ヴァンペール殿下の用件は、アルナートの魔女に会うことだったみたい」

ブライトは王都向けの領地の決済報告書を作成しながら聞いている。

「そうか。私やフランは席を外してくれと言われていたから、大層な用件だと思っ

ていたのだが…」

報告書から娘のソフィアージュに視線を移す。その赤茶の瞳は、不愉快そうに細

められている。

「貴族様に見れば、大層な用事なんじゃない」

「ソフィ」

言葉が過ぎると言外に伝えられる。

わかってはいるが、大切な1日をつぶされた身としては、嫌みのひとつでも言いた

い。だから、謝罪の言葉は口にしない。

「ああ、それと王城に招待されて、その話受けといたから」

何でもない事のように話す。

「それはどういう意味だ？」

眉間にしわを寄せて、ソフィアージュを責めるように見る。

「そのままの意味」

本当は、招待じゃなくて依頼で会ってほしい人がいると言われたんだけど、説明

すると絶対に止められるから言わない。

「ここは嫌いじゃないけど、たまには外に出てみたい」

本来の貴族のお嬢様なら、社交界やお茶会で華やかな日々を過ごしているはず

だ。でも、田舎で金のない貴族には、そんなお金はどこにもない。そのことを両親

が不憫に思っていることを知っている。ずるいとは思っが、今回はその親心を利

用させてもらっ。

「……わかった。気をつけて行って来い」

しびしびと言った感じで承諾する。

「ありがとう。お父さん」

笑みをつくって礼を言う。

「それじゃ、失礼します」

話を終えたソフィアージュは、自室へと戻る。

夕食も終わりゆっくりと独りの時間を堪能していた。

ふと、肝心なことを思い出す。

そう言えば、いつ出発するのか、誰に会うのか、何も聞いていない。夕食のとき

に聞いておけばよかった。あっ！！しかも、お父さんに何で殿下と同じ質の魔力

を持つてるのか聞いただすの忘れてた。王城に行く許可をもらっの

に、気をとられ

てたからなあ。

ちらりと時計を見る。

20時かあ。年頃の娘が独身男性の部屋を訪ねる時間じゃないなあ。でも、聞かな

いことにはどうしようもない。行ってくるか。

ヴァンペールのいる客間に向かおうとドアの前に立つ。

コンコンっとノックの音がする。

「夜分遅くに失礼するよ。明日の出発の時間を伝えに来た」

どうやらヴァンペール本人がわざわざ部屋まで来てくれたようだ。ちょうどドアの

前に立っていたので、さっさとドアを開ける。

「こんばんは。ちょうどそのことを聞きにそちらに向かうところでした。立ち話では

何なので、どうぞ中に入ってください」

こんな時間に部屋に入れると貞操観念を疑われそうだが、王族が部屋まできて

招かないのも失礼な気がする。

「意外と奥ゆかしいんだね」

扉を開けたままにして、留め具の代わりに椅子を置く。そんなソフイアーヂュをみ

て、感心したように言った。

「ただ、失礼にあたらないようにしてるだけです」

意外とはどういう意味だ。第一、部屋に入れたのも、男として意識してませんと言

い切るのも何か不敬にあたる可能性があるからだ。他意は無い。

「そうか。それは残念だな。私は、君を意識せずにはいられないんだが」

妙に艶めいた視線を送ってくる。

「お戯れはよしてください」

紅茶を入れながら、ぴしゃりと言いつ。

「これは手厳しいな」

相変わらずエロい視線をよこすが、無視をして入れた茶を出す。

「それで、明日の何時に出発なさるおつもりですか」

椅子に座り、さっさと用件を聞く。

「早朝7時に出発するつもりだ」

紅茶の好い香りがする。

「7時？ずいぶん早い出発ですね」

両親には伝えたのだろうか。

というか、ヘレンの朝食が食べられないではないか。

「ああ、もちろんブライト氏には伝えてある」

「そうですね。王都まではそんなに時間がかかるのですか？」

ヴァンペールはソフィアージュの質問に驚いたように見つめる。

あれっ？変なこと言ったかな？

しばし絶句をしていたヴァンペールは、半ばあきれながら尋ねた。

「……………君は王都に行ったことがないのかい？」

「はい」

ヴァンペールの様子に少し恥ずかしくなるソフィアージュ。

仕方ないじゃないか。金がないんだから。

「そうか。馬車で大体10日ほどだ」

予想以上にかかるなあ。転送陣で一気にいけなかな？ヴァンペール殿下の魔

力を利用すれば、30人ぐらいまでなら王都まで行けそうだな。

「ヴァンペール殿下のお共の人数は、何人ですか？」

「トーマスを含めて5人だ」

ということは、私を含めて7人か。なら問題ないな。

「転送陣を作るので、明日の出発を朝の10時に変更してもらえませんか」

私の発言に本日2度目の絶句をする。美形はどんな表情しても美形なんだなあ。

それにしても、またズレたことを言ったらしい。もしかして、時空間関係の魔法っ

て難しいのか？結界のことも褒めてたし。他の人が理解できないのは、魔力が微

量だからだとばかり思ってたけど、違うのか。ん？待てよ、ヴァンペール殿下が

結界に気付いたってことは、お父さんも気づいてるってことだよな

？今まで黙認

してたのか。お父さんにヴァンペール殿下の魔力が酷似している理由を聞いた

ださなくて正解だったかもしれない。墓穴を掘るところだった。

「すまない」

ソフィアージュが考え込んでいるうちに、ヴァンペールの止まっていた思考が動き

出したらしい。黙り込んでいたことに謝罪している。

「いいえ。気になさらないください。私に変なことを言ってるのは自覚しています

ので。それで、出発の時間は、ズラすことはできますか？」

少し前からはあるが、まあ嘘ではない。

「ああ、王都に到着する時間が10日以上かかるわけでないのなら、問題はな

い

「そうですね。それでは、出発は明日の10時をお願いします。10時なら朝食も

取っていった方がいいと思いますので、私の方から父に伝えておき

ます」

へレンの朝食が食べられる。うふふ。

「ああ、よろしく願います」

ソフィアージュの提案に賛同し、スツと席を立つ。

「長居し過ぎたな。そろそろ失礼するよ」

ソフィアージュも席をたち、ヴァンペール殿下を見送ろうとする。

ふと、ソフィアージュは思い出し、そして今立ち去ろうとする殿下に尋ねる。

「最後に一ついいですか？」

ソフィアージュの方を振り向いたヴァンペールは無言で促す。

「私に会わせたい方とはどなたなのですか？」

「ああ、言ってなかったな。私の妹だよ」

出発そして到着

いつもより少し早い朝食を終えたソフィアージュは、自室でせつせと魔法陣を描い

ていた。自分を除いた6人を王都まで転送するのに必要な魔力を割り出し、悪用

されないように使い終わったら、自動的消滅するように仕込んでおく。ちなみに、

ソフィアージュ自身は、時空間の魔法に関しては、魔法陣や呪文を必要としな

い。ただ、それは自分だけが使用する場合であり、他人も同じように転移する場

合は、やはり魔法陣が必要である。そして、ソフィアージュ以外の魔力を必要とす

る。そのため、6人を王都まで転送するのは、実際はヴァンペールがやっているこ

とになる。ここで、少し説明すると実際に魔法を行使する場合、二つのことをクリ

アしなければならぬ。一つは実行するための力、これが魔力。もう一つは、原

理を本能的に理解すること。これのポイントは”本能的”な理解である。それは、

遺伝子レベルで書き込まれた情報で、本来は理解できない。そこを補助するの

が、魔法陣や呪文である。基本的に呪文は、原理を知識として理解していれば

出来るもので、知識もへったくれもないけど、とりあえず魔力はあるぜ、って人が

使うのが魔方阵だ。しかし、この魔法陣が結構曲者なのだ。そもそも、本能的な

理解を補助するのだから、その魔法陣にはそれ相応の情報が入っていないとい

けない。そうでなければ、不発でおわったり、誤作動を引き起こす。また、下手す

ると魔力が暴発する。ゆえに、その魔法陣を作成するのは、本来、呪文も魔法陣

も必要ない人が作り出すものだ。そして、その魔方阵は間違いなく写すことに

よって、本来使えない人も魔力さえあれば使えるようになる。だから、今回の転

送は、ヴァンペールが行っていることになるのだ。

「よしつ。出来た」

転送陣を書き終えたソフィアージュは、両手をあげ伸びをする。

ノックの音がして振り返るとそこには、朝食を終えたフランとヘレンがいた。

その手には、上品な黒のレースを使った藍色のドレスがあった。

「王都に行くんだからそれなりの格好しないといけないわ。ソフィアにっこりと笑うフランに泣きだしたくなるソフィアージュだった。

出発までそれほど時間がなかったため、長いこと拘束はされなかったが、着せ替

え人形のごとく弄ばれたことに対しての苦痛は変わりはなかった。出発前から何

とも言えない徒労感に襲われながらも、ヴァンペールに魔方陣の説明をする。

「特別なことをする必要はないのか」

不思議そうに尋ねてくるヴァンペール。

「一般的な魔法陣がどのように使用されているのか、知らないのでも言えない」

のですが、注意事項は先程伝えたとおりです」

同行者がヴァンペールから3メートル以上離れないこと。

ヴァンペールは王都の情景のみを思い浮かべ、

出来るだけ他のことを考えないこと。

私から1メートル以上距離を取ること。

以上の3つをヴァンペールに伝え、紙に描かれた魔法陣を渡した。

「そうか。ところで、なぜ君から少し距離を取る必要があるんだい？」

「私は何もなくても転移出来るので、転移の最中に干渉しあって誤作動起こさな

いようにです」

事なげに説明するソフィアージュに半ば疲れたように言う。

「君には驚かされてばかりだな。この2日間で一生分の驚きを経験した気分だ」

どうやらまたズレたことを言ったらしい。王都についてから軽々しく魔法の話をし

ない方が無難かも知れない。

残念ながら、その判断をする暇もなくばらすことになるのだが。

ヴァンペールと打ち合わせが終わり、一緒に家の正門まで移動する。

「それにしても君の屋敷のメイドや執事はほとんど見かけないな」

「そうですね。ヘレンとゴルバの二人以外はいないので。何かご不便でしたか？」

まあ、不便だって言われても、もう屋敷を出るのだから関係ないけど、社交辞令

で一応聞いておく。

「いや…、特に不便はないが」

一瞬驚いた顔をしてから、気まずそうに言った。

何だか引っかかる言い方だな。

「何かありましたか？」

「意外と人使いが荒いのだな、と」

苦笑いをしながら言う。

「人聞きの悪いこと言わないで下さいよ。ヘレンもゴルバも働き過ぎないように、」

色々と役立つ魔方阵を渡してあるんです」

その発言に再び苦笑し、自分より頭一つ小さい黒髪の少女を見てヴァンペール

は思った。

本当に君は”アルナートの魔女”なんだな。

ヴァンペールが考えることを知る由もないソフィアージュは、眼前に見えた、正門

にいる両親に駆け寄る。父には道中気をつけろと言われ、母には、王都に行つて

もっとおしゃれを勉強してこいとお小遣いを渡された。両親と別れのあいさつを済

ますと、ヴァンペール率いる護衛の方々に挨拶をする。

「はじめまして、ソフィアージュ・アルナートと申します」

ソフィアージュがあいさつすると、先日客間であったおっさん騎士ことトーマスが

簡単に他の護衛の方々を紹介する。

暗い紫の髪をした、人の好さそうな、リカルド・ジエネシス。

深紅の髪が印象的な唯一の女性、エイダ。

水色の髪の超絶美形の、ルー・アンガーズ。

若葉色の髪を持った、どう見てもおこちゃまな、リオン・サーチャ
ー。

何て言うか、うん。ずいぶんデコボコ部隊ですね。その上、驚いた
ことにこの人た

ちは、騎士なんだって。王都の騎士様は、ずいぶん個性的なんだな
あ。

微妙な顔をしながら返答するソフィアージュに一番まともそうなり
カルドが、小声

でフォローした。

「私たちの部隊が変わっているだけで、他の騎士の方々は、私たち
に会う前の想

像どおりです」

きつとこの人は苦勞しているに違いない。

一通り紹介を終え、出発の準備をする。

護衛の人と馬車をヴェンパールを中心に集める。

「では、これから出発する。準備はいいな？」

ヴァンペールに皆が了承したところで、ヴァンペールは意識を集中させ王都の正

門を思い浮かべる。ヴァンペールを中心とした6人（馬車も含む）は、強い光に包

まれ姿を消した。その場にいるソフィアージュは、王都がどうということかわからな

いので、ヴァンペールのいる場所に照準を合わせて転移する。

そして、ついた先は王都の正門ではなく、どう見ても王城の正門だった。

固く閉じられた鉄扉の様子は繊細で、外から侵入者が入ってこれないように外壁

は10メートル以上ある。よくよく見ると、その外壁は、光の角度を変えてみると

うっすらと模様が浮かび上がる。

数秒先に到着していたヴァンペールは、不思議そうにしていた。

遅れてきたソフィアージュを見つけヴァンペールは、

「すまない。王都の正門ではなく、王城の正門だったみたいだ」

いやいやいや、王城の正門じゃ騒ぎになっちゃいますよ。殿下！！！！

ソフィアージュの思った通り、正門の憲兵が驚き、近くにいた大臣
やら通行人や

らが騒いでいる。

ああ、もう、どうにでもなれ。

諦めの境地に達したソフィアージュは、天を仰いだ。

いい天気だなー。

出発そして到着（後書き）

本文説明だと魔力のないソフィアージュがなぜ魔法を使えるのかという、疑問がわいてくる方がいると思われる。その方々は、話が進むにつれて分かるのでご辛抱ください。

失踪（前書き）

こっちの方でもやっと”世界の柱”の主人公であるアンジエラの名前ができました。

失踪

空間転移で王城に到着して、盛大に王城関係者を騒がせていた。

ズキズキと痛む頭を抱え込む。とりあえず、ヴァンペール殿下が責任を取って、

説明をしてくれたおかげで、ざわついた雰囲気は少しは落ち着いたのだが、何だ

か不穏な空気が流れている。本来なら、ヴァンペール殿下が、妹君を紹介してく

れるはずだったんだけど、何故かいま、城の玄関で待たされている。そして、何

なのだ。この刺さるような視線は。どうして通る人全て、私を親の敵のような恐ろ

しい目つきで見るのだ。ヴァンペール殿下の反応から、時空間関係の魔法が異

常なのは分かったが、そんなに恐ろしい視線をぶつけられる覚えはない。断じて

ない！！そして早く戻ってこい、ヴァンペール！！

居心地の悪さをひしひしを感じながら、ソフィアージュは静かにヴァンペールを待

つ。しばらくすると、硬い表情をしたヴァンペールがやってきた。

「ソフィアーヂュ」

まっすぐにソフィアーヂュを見つめる。

そういえば、王都に誘った時もこんな風に名前を読んだなあ。

「すまないが、一緒に王に会ってくれないか？」

普段のふざけた雰囲気が一欠けらもない。

「はい」

まじめなヴァンペールにソフィアーヂュも珍しくまじめに返した。

なんとなくだけでも、ものすごく面倒なことに巻き込まれていくような気がした。

ヴァンペールの案内で、王の私室まで来たソフィアーヂュ。

ヴァンペールと同じ金髪碧眼の渋いおっさんが部屋にいた。

「陛下、お連れしました。この少女が噂の”アルナートの魔女”です」

片膝をつけて頭を下げるヴァンペールをみて、私もすべきなのだろう

うかとおろお

ろする。そんな私を見かねてか、陛下は「私室なのだから、楽しんで」とヴァン

ペールに言った。ヴァンペールは、その言葉に立ちあがり顔をあげた。その様子

を見た陛下は、ヴァンペールに部屋の外で待機するように命じ、私に椅子に座る

ように促した。ふかふかの椅子は非常に座り心地が良かったが、さすがに一国

の王を前にそんな余裕はなかった。

「名はなんという？」

不意に言われ、少し挙動不審気味になったが、ちゃんと答えられた。

「ソフィアージュ・アルナートと申します」

それから、王は魔法に関することを聞き、何か得心したようにうなずき、頭を下げ

て「何でもするから、娘を探してくれ」と言った。王の懇願を断れるわけもなく、承

諾した。話が終わり、王の私室を出ると外で待機していたヴァンペールに会う。

おそらくその内容を知っているヴァンペールは、すまないと謝罪の言葉を述べ、

もうひとつ頼みたいことがあると言われた。

乗りかかった船だ。観念して話を聞こうと思い、

「何でしょうか？」

と尋ねた。ここでは、「人目を憚るから私の自室で」「言って、ヴァンペールの自室

に案内された。

ヴァンペールの自室に到着し、侍女が紅茶を入れてくれる。

ヴァンペールの指示で侍女たちは、部屋を出ていった。王の自室とは対照的に

落ち着いた雰囲気部屋だ。侍女が入れてくれた紅茶を一口含む。

おいしい。

ほんのり香るバラの香りは、なんとなくヴァンペール殿下のイメージにあってる

な。それにしても、上品な香りだ。この紅茶はいくらぐらいするんだろう。

うーんと、首をかしげるソフィアージュ。

「紅茶は口にあったかな？」

ヴァンペールの問いににっこりと答える。

「はい。とてもおいしいです」

ソフィアージュの返答にヴァンペールも笑顔を作る。

「それは良かった」

「それで、お話とは何でしょうか？」

紅茶を机に置き、本題に入るべくソフィアージュは問う。

「まずは、状況の説明をしよう」

ヴァンペールから先程の作っていた笑みは消え、至極真面目な顔になる。

ヴァンペールの話は、予想以上に面倒なことだった。要約すると、今日会うはず

だった妹君が、今朝から失踪していた。これだけでも十分な騒ぎなのだが、その

妹君は、「世界の柱」に選定されている。このまま見つからないと世界滅亡となっ

てしまうらしい。遠く離れたアルナート領でも、その選定式の話は聞いたことが

あった。当時8歳（心はプラス26歳）の私は、そのお姫様を気の毒だと、他人事の

ように思っていた。

それにしても、世界を捨てて逃げるなんて、すごい行動力だな。

警備もそんな簡単に抜けられるものじゃないだろうに。

一体どうやって逃げたんだろう？

「そのお姫様は、どのような方法で逃げたのですか？」

思いついた疑問をヴァンペールにぶつける。

「私たちがこの王都に来るために使った手段と同じ、空間転移だよ」

その返答に、今日ずっと受けていたきつい視線を思い出す。

ここ数日で知った事実は、時空間に関する魔法は、決して”簡単”でないこと。

そこから導き出される答え。

「もしかして、私、疑われていますか？」

その問いにヴァンペール殿下は苦笑いを返してくれた。

ああそうですか。疑われてるんですか。

明らかに不機嫌になったソフィアージュの様子をみて、

ヴァンペールのフォローが入る。

「陛下には私の方から説明してあるから、君が今回の騒動に何の関わりもないこ

とは、伝わっているよ。だからこそ、君は王の自室に呼ばれたんだ」

そのフォローは言外に、王とヴァンペール殿下以外は疑っているってことを伝え

ている。ソフィアージュは、今の状況に大きいため息をつく。

その様子を見ていたヴァンペールは、「すまない」と一言謝罪を述べた。

「それで、話は終わりですか？」

出来れば終わってほしい。そして、さっさと返してほしい。

ソフィアージュは、王に”娘を探してほしい”との依頼を承諾したのだから、帰れな

いのが分かっているもそう思わずにはいらなかった。

「いや、本題はここからだ」

ヴァンペールの言葉に、さらに面倒なことを言われる気がしてならない。

「陛下には、おそらく妹の、アンジェラの搜索をお願いされたいのだらう。だが、私と

しては、アンジェラのやっていることに手を貸してやりたいんだ」

何を言ってるんだ、この人は？

「それは、そのアンジェラ様が見つからないように匿えておくことで
すか？」

訝しげに尋ね返すソフィアージュの言葉は間髪いれず否定される。

「いや、そういうことではない」

「では、どういふことなんでしょうか？」

意味が全く分からないと言った風に聞くソフィアージュに、帰ってきた答えは、意

外なものだった。

「アンジェラの行動から察するに、おそらく各種族の”柱”に会いに行くことが目的

だらう」

どう見ても推測の域を超えない解答だが、その表情は確信していた。

「それでは、私にその目的遂行のために手伝えということですか？」

「ああ、そういうことになるな。君の力なら不可能ではないだろう」

その言葉は賛否を問うものではなかった。

「まずは、アンジェラの部屋を調べてほしい。既にアルベルトがいると思うが、

君の方が色々と分かりそうな状況だろう」

ヴァンペールはさくさくと話を進め、アンジェラの部屋に案内する。

移動中にぼんやりとヴァンペールの横顔を眺める。

本当に整った顔立ちをしている。筋の通った鼻に、意志の強そうな蒼の瞳。

入念に手入れでもしてるのかと思うほどきれいな形をした肩。

ソフィアージュの視線に気づいたヴァンペールは、にこりと微笑む。

うん。美形万歳。

きつと普通の女性ならこの笑顔に崩落するんだろう。頬を染めて。

まあ、私には関係ないな。美形は観賞用だし。

微笑み返し、視線を進行方向に戻す。

実は、ヴァンペールの笑みを見て、心拍数が上がっていたのだが、そのことに適当な理由をつけて気付かないふりをするソフィアージュ。

しかし、ヴァンペールの瞳には、頬を朱に染めながらも平気なふりをしているソ

フィアージュがしっかり映っていた。

兄弟

ヴァンペールに案内されて、アンジェラの部屋に入った途端に、異常な量の魔

力を感じる。その強さにクラリを立ちくらみが襲った。

「大丈夫か？」

がちりと肩を両腕つかまれ、体を支えらる。

体制を立て直し、お礼を言おうと顔を上げる。

そこにいたのは、王族の証である金髪にヴァンペールとは対照的な深紅の瞳を

持った少年だった。年は、ソフィアージュと同じぐらいだろうか？

「ありがとうございます。大丈夫で……。」

お礼を言っている途中に腕を掴まれ、ぐいっと後ろに引っ張られる。

首に軽く腕を回され、ホールドされる。

後ろを向き、思いつきり睨む。

「ははは。そんなに睨まれるとゾクゾクしちゃっよ」

何を言ってるんだこの男は。

さらに強く睨み、まわされている腕をバシバシ叩くと、
しぶしぶと言った感じで解放した。

「何やってるんですか、兄上」

半ばあきれ気味に少年は言った。

「いや、すまない。見つめあう二人に嫉妬してしまってね」

はあ、っと盛大に少年がため息をつく。その様子に、幼子に話しかけるように、

ヴァンペールは言う。

「ん？アルベルトも抱っこして欲しいのか？」

その言葉に半眼になるアルベルト。

「こんな状況で、からかわないで下さい」

ヴァンペールに心底疲れたように言い、ソフィアージュに視線を移す。

「はじめまして、アルベルト・デルマン・デステンブルクだ」

「はじめまして、ソフィアージュ・アルナートと申します。以後お見知りおきを」

ヴァンペールに初めて会ったときと同じ挨拶をする。

「ああ、覚えておく。ソフィアージュ。それで早速だが、魔方陣に見てほしいんだ

が、その体調は大丈夫か？」

先程の立ちくらみを心配してくれているのだろう。

さすが王位第一継承者。気配りもできるんですね。

ヴァンペールと違って思いっきり顔を上げなくても話せるし、

良い子だ。顔もいいし。

「心配ありがとうございます。濃い魔力に少し干渉されただけですから、

大丈夫です。後、ソフィアージュではなく、ソフィとお呼びください。その方が慣れ

ているので」

にこりと礼を述べ、ついでに愛称で呼ぶようお願いします。

「ああ、わかった。ソフィ」

一瞬、驚いたようにソフィアージュを見たが、すぐに笑顔を作つて了承する。

と、再び腕を引っ張られ、ヴァンペールにホールドされる。

「私には、ソフィと呼ぶようお願いされた覚えがないのだが」
後ろのヴァンペールを見る。

表情はニコニコと笑っているはずなのに、

ゾクゾクとした悪寒がソフィアージュを襲った。

はぁっと再び深いため息をついてから、アルベルトは、

「やることがあるから部屋の調査を私に任せたのではないですか？」
と呆れた様に言い放つ。

ヴァンペールの視線がアルベルトに移り、ホッとする。

「賢くなったな。アルベルト」

再び幼子を相手するような口調で、言う。

その声音だけだと、その後によしよしと頭でも撫でそうだ。

「兄上」

その低い声から、アルベルトが怒っていることが伝わる。

「本当に賢くなった。昔は何かある度に兄上、

兄上と泣きながら私に飛びついてたのになあ」

懐かしそうに言うヴァンペール。

「兄上。いい加減にしてください」

さらに低い声を出して、ソフィアーヂュをヴァンペールから引っ張り出す。

一瞬、助かったと思ったが、くるっと向きを変えられ、

何故かアルベルトにホールドされた。

えっ？なんで？

ヴァンペールより身長が低いせいで、後頭部に吐息を感じる。

「悪かったよ。それにしても本当に賢くなったな」

怒り心頭のアルベルトに謝り、ちらりとソフィアーヂュ見て言った。

その言葉でソフィアーヂュを開放するアルベルト。

「わかったら、さっさとすべきことをして下さい」

突き放すようにアルベルトは言い、作業に戻ろうとソフィアーヂュに言った。

言われたとおりに素直に作業に戻るソフィアーヂュ。

屈んで床いっばいに描かれている魔方陣に手をつける。

後ろから、「またあとでね、ソフィ」と声がし、ドアがしまる音がした。

ソフィと愛称で呼ぶことを許可した覚えはない。

どうでもいいことに気を取られそうになり、頭を振り魔法陣に意識を集中する。

映像が頭の中に流れ込んでくる。どれも一瞬で切り替わるので、わかりづらい。

短く切った茶色の髪の小柄な少女と女神のような美しさの少女が、にこりと笑う。

そこで映像は切り替わり、青みがかった黒の髪を持った精悍な顔つき
の騎士が

写る。その映像から、この少女の騎士に対する気持ちが流れ込んでくる。胸が苦

しくなるような甘酸っぱい思い。あまりの恥ずかしさに、パッと目を開く。

うわー。知らない情報まではいってきたよー。

顔を真っ赤にしてうつむくソフィアージュに、不思議そうに尋ねる。

「どうした？何かあったか？」

はっと我に返り、アルベルトの方を向く。

「いいえ。何もありません」

「そうか。ならいいんだが」

再び目を閉じて魔方陣に意識を集中する。すると、ソフィアージューはこの部屋に

入ってきたときの魔力の根源に気付く。

魔法陣にまだ魔力が残ってる。お姫様、あの騎士のことを転送中に考えたん

だ。騎士をセットして、お姫様を思えば、直接お姫様のところまで行けそう。

でも、多分行くのは騎士だよな。うん。その騎士に会ってみるか。

後は、とりあえず、お姫様の魔力と隣にいた少女の魔力は覚えておこう。

これで、大まかにだけど二人の探索ができるな。

ゆっくりと目を開け、立ちあがる。

床に広がる魔方陣を隅々まで確認して、書き込まれた情報を読み取る。

そして、その情報にソフィアージュは絶句する。

この魔法陣、目的地が精霊界だ。

アルナート領のお隣

魔法陣から得た情報を整理しながら、アルベルトに報告する。

「まず、はじめに今からお伝えする内容は、度々信じられない情報があると思わ

れますが、どうか何も言わずに最後までお聞きください」

説明の前に、途中で話を遮らないようにお願いし、アルベルトが了承したのを確

認してから、再び話を続ける。その脇には、忙しそうにペンを動かす人がいる。

今の発言はメモを取らなくてもいいんじゃないの？

「この魔法陣から、得られて情報は大まかに4つです。

一つ目は、アンジェラ様の魔力、

二つ目はアンジェラ様と共に去った少女の魔力、

三つ目は黒髪の騎士がまだこの魔法陣を使用できること、

最後に転送先が精霊界であるということ、以上4つです」

他にもアンジェラ様とその騎士を好きだとか、一緒に去った少女が実は同性であ

る主人にちよつとヤバいくらいの好意を抱いていることに気付いてない事とかそう

いういらぬ情報も入ってきたんだけど、言う必要ないよね？

「ふむ」

ソフィアージュの言葉を聞いて、しばし考え込む様に腕を組んでいたアルベルト。

「その三つ目の黒髪の騎士の情報は無いのか？」

見当は付いているアルベルトだが、その情報だけでは確信が持てず、問う。

「そうですね、容姿に関するものではありません」

それ以外の情報は、アンジェラの純情を汚すことになるので、言う必要ないなら

言いたくない。

「それで十分だ。教えてくれ」

「ええとですね、青みがかつた黒髪に深い藍色の瞳をしていました。あと、騎士ら

しくて、かつこよかったです」

あつ、最後の情報は個人の感想なんだから言う必要ないじゃん。

案の定、微妙な表情をしているアルベルト。

頭を抱えて悶えそうな恥ずかしさに耐えるソフィアージュ。

「その騎士が魔法陣を使えると言うことだが、

逃走に手を貸していたということか？」

不意に話を振られ、恥ずかしさに悶えいたソフィアージュは、変な声を出す。

「ほえ？・・・あつ、はい、じゃなくて・・・おそらくですが、違うと思います」

何とか答えたソフィアージュ。

うわああ、さらに恥を上塗りしたよ。

ソフィアージュの心内など知るはずのないアルベルトは、さらに質問を続ける。

「なぜ違うと思うのだ？」

次は、深呼吸をして気持ちを落ちつけてから答える。

「魔方陣にその騎士の魔力が全く残っていないのと、騎士の情報が極端に少な

いからです。何かしら関わっているならば、実際にこの魔法陣を使用しなくても、

微量な魔力が残りますし、その手伝った経緯の情報が魔法陣から得られるはず

です」

「では、その騎士はなぜこの魔法陣を使用することができるのだ？」

まあ、当然の疑問ですよね。

「この魔法陣を起動するには、想像を絶する魔力が必要です。その魔力の根源

は、アンジェラ様です。おそらくですが、そのアンジェラ様が転送をする瞬間にそ

の騎士のことを考え、そして心のどこかで一緒に来てほしいと願っていたのでしょ

う。だから、この魔法陣にはその願いの魔力が残っており、その騎士に限り、アン

ジェラ様のところに転送することが可能です」

本当のところは、去り際に忘れられない恋心を抱いて、案外その思いが強かった

というのが正しいのだが、まあ、全部言うのはね。

「なるほどな。それでは、最後に転送先が精霊界というのは、本当か？」

これも当然の疑問だよ。私も未だに信じられない。

一体どれだけ魔力あるんだよ、お姫様。

「正常に動作していれば、精霊界にいます」

十中八九、正常に動作しているだろう。なぜなら、この魔法陣の情報、精霊界

に関する情報がかかりの量、書かれており、なおかつ、この魔力の残滓の量から

お姫様はそれを可能にする魔力の持ち主だ。

「正常に動作していれば、か。ソフィは、どう考えているのだ？」

「精霊界にいると思われま。この状況から察するに失敗する確率は、

1パーセントもないでしょう」

その言葉に安堵の表情を見せるアルベルト。

愛されてるんだなあ、お姫様。

「調査の協力に感謝する。疲れただろう、少しの間休め。客間に案

内させる。」

そう言つて侍女を呼ぶアルベルト。

「あっあの」

焦つてアルベルト呼びとめる。

「なんだ？」

侍女を呼んでいたアルベルトがこちらを向く。

「後で構わないので、黒髪の騎士に会わせてほしいんですが」

「ああ、始めからそのつもりだ。準備が整うまで少しかかるから、休んでおけ」

なんだ、そうなのか。焦つて損した。

「お言葉に甘えて休ませてもらいます」

丁寧にお礼を言い、侍女の案内で客間まで向かう。

客間についたソフィアージュは、侍女の入れた紅茶を飲みながら、考えていた。

騎士に会うまで時間がかかるのなら、魔方阵から得た魔力の情報で、探索して

大方の位置の検討をつかないかな。やってみる価値はあるな。

目を瞑り、意識を集中する。魔法陣から得られた情報で精霊界の境界近くまで意

識を飛ばせたが、中に入れない。薄くはられた膜は、人間界にあるものとは別の

魔力が発せられている。

うーん。どこか魔力の薄くなつてるところないかなあ。

一旦距離を置き探索範囲を広げると、見知った気配を察知する。

えっ、この気配。

アルナート領に自分で張った結界の気配だ。

何でこんなところで、その気配を感じるの？

さらに探索範囲を広げると、驚き事実を知る。

アルナート領を囲む東側の山を越えたところに精霊界がある。

結界が張ってあるので、普通の人間なら知らない間に

その境の山に戻されるようになっていたが、結界を外せばその世界は陸続きだ。

そして、ふと思い出す。そう言えば、初めて結界をアルナート領に

張ったときに、

東側の山だけ何故かうまく形成されず、その位置を微妙にずらしたんだっけ。

まさか、これのせいだったとはなあ。そりゃ、うまく張れないよ。

情報が全くちがうもんなあ。

精霊界の結界に近づきポンポンと、叩く。

と、結界の中からいきなり声をかけられた。

「そんなところで何をしているのですか。」

侍女とコンタクト

「そんなところで何をしていますのですか」

その声の主は薄い水色の髪に金色の瞳をもち、

エルフの証である尖った耳を持っている。

「精霊界のエルフですか？」

もしかしたら、何か情報を持っているかもしれない。

「そうですが、あなたは何をしていますか？ 次元の魔女」

次元の魔女？それって私のことだよね？

後ろ振り向くが誰もいない。やっぱり私のことだ。

最近、魔女って呼ばれることが多いなあ。

「ちよっとね、人を探してるの。そっちの精霊界にいるはずなんだ。澄んだ藍の魔

力を持った茶髪の女の子と、虹色の魔力を持った金髪碧眼の美少女
なんだけ

ど、こころあたりない？」

「藍の魔力の少女なら、知っています」

「ほんとう!？」

あまり期待をしていなかったソフィアージュは、つい大きな声を出してしまつ。

「ここですそを吐いて何の得があるんですか」

そうだよね。吐くなら最初から知らないでいいもんね。うんうん。

「できれば、その子のところに連れて行ってほしいんだけど、お願いできる?」

「長に確認を取るので、しばし待っていてください」

そういつてエルフは、その場からいなくなる。

どれくらいかかるんだろう?あまりかかると困るんだけど、大丈夫かな。

数分もしないうちに、エルフは戻ってきた。

「条件付で許可が下りました。申し訳ありませんが、

探索の魔法を解除していただけますか?」

おそらく明確な場所を知られないためだろう。

仕方なくソフィアージュは探索魔法を取り消す。

「これでいいですか？」

「はい。それでは、直接少女の意識下に飛ばします」

連れて行ってもらえると思っていたソフィアージュは、「えっ」と声を出していたが、

気づいたときには、真っ白な空間にいた。

その空間の上方には、20センチ四方大きさの映像が無数に存在した。

うーん。どうやら眠りについてるらしい。

どうにかして見つけないと、意思の疎通ができそうにないな。

どうにかならないもんかと、あたりをうろついていると、

茶髪の少女がぼんやりと立っているのを発見する。

その周りだけ映像がまったくなかった。

あれ、もう少しで目を覚ましそうな雰囲気？

急いで少女のもとへと駆け寄る。

「やっと見つけた」

少女は、ソフィアージュの方へと振り向く。まじまじと見た後に

「あなたはだれですか？」

と、聞かれた。

そうだった。私が一方的に知ってるだけで、

マリアは私のことを知らないだった。

「ソフィアージュ、えっと、アルナートの魔女の方がわかりやすいかな？」

アルナートの魔女という単語に反応する。

『「アルナートの魔女」、噂ぐらいは聞いたことがある。魔力が全くないのに、さま

ざまな魔法陣を駆使して魔法を使う魔女。魔女が良しとしない人は、アルナート

領にすら入れない。』

ずいぶんとしゃべるなと思ってマリアを見ると、口が動いていない。

あちゃー。マリアの意識下だから、心の声まで聞こえるよ。

それにしても、噂になっているのは知ってたけど、そういう風に言われてるんだ。

知らなかった。

「どちらでも構いません」

『呼び名なんてどうでもいい』

うわー、意外と辛辣なお言葉だ。

私に興味がないということがひしひしと伝わってくる。

「そう、じゃあ、ソフィでいいや。それで、マリアは今どこにいるの？」

とりあえず、気を取り直す。

『どこといわれても、こんな真っ白な空間がどこなんて知らない』

マリアの心の声を返答と勘違いしてソフィアージュは答える。

「ああ、ごめん。ここはあなたの夢の世界で、私はアンジェラ様を探してる」

夢の世界というのは、おそらくであるが、まあいいよね。

『アンジェラ様を？精霊界にいる私にコンタクトをとれているのだから、』

アンジェラ様が見つかるのも問題かもしれない。

そんな、何もできないまま連れ戻されるなんて』

これは、どう考えても心の声なのだが、”精霊界”という単語に気

をとられているン

フィアージュは、再び勘違いをする。

「えっと、アンジェラ様とマリアは精霊界にいるんだね。それで、マリアとアンジェ

ラ様は、精霊界のどのあたりにいるの？」

『さつきから声に出していないのに何で？』

えっ、もしかして私、心の声に返答してた？

ソフィアージュには、心の声もマリアが口に出した返答も同じように聞こえている

ので、口が動いているか確認しないとどちらかわからなかった。

「ああっと、そうか。説明してなかった。えっと、ここはマリアの夢の中だから声に

出さなくても意志が伝わるの」

ものすごい勢いで睨まれる。

それと同時に、怒りの感情が直接的に伝わってくる。

あわわわ。すごい怒ってる。

怒気を直接感じるソフィアージュは、シユンとして、謝罪を告げる。

「うっ、ごめんなさい。忘れてたのよ」

ソフィアージュの謝罪にとりあえず許したらしく、もう怒気は伝わってこなかった。

ちなみに、伝えることを忘れていたのは本当だ。

「見つけたらすぐに連れ戻すのですか？」

普通に考えればそうなる。

「いいえ。すぐには連れ戻さない。アンジェラ様には、目的を果たしてもらっ必

要があると思うから。ただ、マリアとアンジェラ様だけじゃ危ないから、もう一人

そっちに送ろうと思ってる。で、その人とマリアとアンジェラ様に合流して欲しい

んだよね」

その返答に少し驚いた様子を見せてから、すぐに話し出す。

「そうですか。なら、お教えします。私はとある事情から、アンジェラ様とはご一緒

におりません。ですから、アンジェラ様がどのあたりにいるのかは、分かりませ

ん。私自身は、エルフの村にいます」

その言葉に他意がないようだ。何の感情も伝わってこない。

「エルフの村ね。じゃあ、とりあえずマリアは、大丈夫そうだから護衛はアンジエラ

様の方に送るね。協力ありがとう」

協力をしてくれたマリアに礼をいい、次も来れるように目印をおいて去る。

王城の客間に意識を戻したソフィアージュは、紅茶を一口含む。

さすがにもう冷めていたが、それでも十分に美味しかった。

時計を見ると、客間に入ってから30分経っていた。

部屋の外からは慌しく移動する音が聞こえる。

まだ時間がかかりそうだ。さすがに朝からいろんなことがあり疲れた。

ソフィアージュは、部屋にあるソファに移動し、仮眠を取ることにした。

侍女とコンタクト (後書き)

やっと時系列が”世界の柱”の第6話まで追いつきました。

転送

金髪の美少女と青みがかった黒髪のイケメン騎士。

金髪の美少女を体調が悪そうだった。ひどく悪そうではないが、だるそうに見える。

る。その様子に近くに居るイケメン騎士は、心配そうにしているものの、どうする

こともできず、ただただ、途方に暮れていた。

ぱっと画面が変わる。

膝を地面につけ、悲しみに暮れる騎士。

その足元には、人形のように眠る金髪の美少女の姿がある。

そして、その美少女の周りには十数人ほどの人が取り囲んでいる。

その中にいた漆黒の髪の少女がこちらを振り向いた。

そして、ソフィアージュに近づく。

「間に合わなかった。これを”彼女”に渡して」

その手にはとても高価そうなイエローダイヤのネックレスが握られていた。

イエローダイヤを受け取り、ソフィアージュは漆黒の少女に視線を戻す。

その容姿はどうみても」

「だった。

客間のソファで仮眠をとっていたソフィアージュは、ゆっくりと目を開ける。

体を起こし、しばしぼんやりとする。

何だか、夢を見ていたような気がする。

しかし、その内容は全く思い出すことができなかった。

ソファで寝ていたので、ドレスに皺が付き髪は乱れていた。

いつものように意識を集中し、ドレスと髪の間を巻き戻し整える。

ふと、紅茶が置かれているテーブルに視線を移すと高価そうな

イエローダイヤのネックレスが置いてあった。

そのネックレスを手に取り、不思議に思う。

このネックレス、最初からここにあったっけ？

トントン、と控えめなノック音がする。

その音にソフィアージュは咄嗟に亜空間にネックレスを隠す。

この亜空間は、ソフィアージュの物置用に作ったものだ。

「ソフィアージュ様、開けてもよろしいでしょうか？」

「どうぞ」

返事と共に扉が開くと、そこにはこの客間まで案内した侍女がいた。

「準備が整いましたので、一緒にアンジェラ様の部屋に来ていただきます」

侍女はそう言っつて、ソフィアージュを案内した。

そして、ソフィアージュは、アンジェラの部屋で問題の専属騎士と対面していた。

専属騎士もとい、シン・ルシュバリエ。

光があたると青く光る黒髪に、黒に見える瞳は、よく見ると深い藍色をしている。

その容姿は、確かに転移の魔方陣から拾った情報から得たものと同じであった。

違うのは、その視点がアンジェラ視点でなく、ソフィアージュ視点であるということ

である。ちなみに、その違いは、シンの周りにキラキラがあるかな

いかである。も

ちろん、キラキラ輝いている方は、アンジェラ視点だ。

「はじめまして、ソフィアージュ・アルナートと申します。今回はお忙しいところ来て

いただきありがとうございます」

専属騎士は、田舎貴族のソフィアージュよりかなりいい身分なので、丁寧に挨拶をする。

「はじめまして、ソフィアージュ殿。シン・ルシュバリエです。暇を持って余していたと

ころなので気になさらないください」

ソフィアージュはその返答に疑問符を浮かべる。

こんなときに何で専属騎士が暇なんだ？

その様子にアルベルトがシンの情報を補足する。

「シンは、専属騎士だ。アンジェラに一番近い位置にいて、逃走をした日の

最後に会った人物だ」

要するにこの専属騎士であるシンは疑われている、ということか。

それで、なにもさせてもらえなかったのだろう。

私としては、アンジエラ様のところに転送するつもりだったけど、疑われてるなら無理かもしれない。だめもとで聞いてみるか。

「アルベルト殿下、少し確認したいことがあるんですが、よろしいですか？」

「なんだ？」

「シン様をアンジエラ様のところに転送するつもりなのですが、

それは可能なのでしょうか？」

ソフィアージュの質問にアルベルトは即答する。

「問題ない。王にも兄上にも許可はもらっている。

後は元老院だが、あいつらのことは、兄上にまかせている」

なるほど。ヴァンペール殿下のやることは、そういった関係のことか。

確かにあの殿下は、そういうのが得意そうだ。

ソフィアージュは、狐と狸が騙しあいしながら、

にやにや笑っているところを想像する。

ぞくつと悪寒が走り考えるのをやめる。

「ソフィ、大丈夫か？やはり体調がすぐれないのか？」

悪寒が走った体を震わせたソフィアージュを心配するアルベルト。

「いえ、大丈夫です」

アルベルトに短く答え、シンへ視線を移す。

「それでは、シン様、先程の話から大まかに予測は付いていると思いますが、

あなたには、アンジェラ様のいる精霊界に行ってくださいませ」

ソフィアージュの言葉にシンは特に何も言わなかった。

「先程アンジェラ様と侍女マリアの探索を行いました。精霊界にいることは確

認できたのですが、精霊界にある結界のせいで正確な位置が確認できませんで

した。この状況だと、シン様も精霊界に入ってから、正確な位置が確認できなく

なると思われます。その対策のために、これを持って行ってください」

そう言つて、ソフィアージュは何もない空間からアメジストの指輪をとりだした。

この指輪は、亜空間に荷物を入れる道具だ。そしてその亜空間を作ったのがソ

フィアージュである。そのため、その空間をたどつて、使用者の位置を把握するこ

とができる。これで、アンジェラの位置が確認できる。

「この指輪から位置を推測します。またこの指輪には、色々な”もの”が入られます。着けてみてください」

ソフィアージュの行動に呆然としていたシンは、ソフィアージュに話しかけられて、

意識を現実に戻す。言われたとおり装備したシンをみてソフィアージュは、さらに

続ける。

「では、次に物を入れてみましょう。えっと」

再び何もない空間からイエローダイヤのネックレスを取り出す。

そのネックレスをみてアルベルトとシンは驚く。

「それは……」

あれっ？やばいもの出したのかな。いつの間にか客間の机に置いてあったから

大したものじゃないと思っただけだ。

その後、シンとアルベルトの話をもとめると、アンジェラにアルベルトが誕生日に

プレゼントしたものらしい。その話を聞いたソフィアージュは、なんとなく渡した方

がいいような気がして、シンに渡す。

「アンジェラ様に会って、体調が悪そうだったら、これを渡してください」

シンにネックレスを渡してから、不意に伝えたソフィアージュ。

しかし、その言葉はソフィアージュが意識して言ったものではなかった。

えっ、何でこんなこと言ったの？

混乱するソフィアージュをよそにそのネックレスを受け取ったシン。

「ソフィアージュ殿、それでこの”荷物”入れには、

どのように入れればいいんですか？」

シンの質問に考えることをやめ、答える。

「魔法を使う時のように意識を集中してみてください。穴ができると思うのでそこ

に入れば終了です。取り出すときも同じように意識を集中して穴ができたら、と

りたい物を想像しながら、手を突っ込んでください。それでとりた
いものが取れま

す」

シンは、ソフィアージュの説明通りにネックレスをしまい、そして
取り出す。

その光景をみてソフィアージュはうなづく。

うん、問題ないね。

「補足をおきますと、その荷物入れは、装備した人の魔力に
応じて許容量が

きまります。また、他の人が装備してもシン様の荷物をとることは
できません。そ

の逆も同じです」

その説明に「そうですか」と答えるだけでやっとのシンであった。

その後、必要なものをどんどんシンの荷物入れに入れていく。

そして一通り終わると、ソフィアーヂュはシンに魔法陣の真ん中に立つよう指示する。

「それでは、アンジェラ様のところへ転送するので、シン様はアンジェラ様のことを

考えてください。出来るだけ、それ以外のことは考えないでください。」

そう言っつてソフィアーヂュは、屈んで床の魔法陣に触れる。

「転送」

小さくソフィアーヂュが呟くと魔方陣から強い光が放たれ、

シンは部屋からいなくなった。

すくつと立ちあがり、小さくため息をつく。

「成功したのか？」

信じられないと言った風に尋ねるアルベルト。

アルベルトの問いにすぐに答えずに、目を瞑っているソフィアーヂュ。

そして、しばらくするとゆっくり瞼を開けて答える。

「はい、成功しました。シン様は確かにアンジェラ様の元にいます」
アルベルトはその言葉に「そうか。」とだけ答えた。

ソフィアージュは、再び目を瞑り、意識を集中する。

荷物入れの亜空間をたどり、現在のアンジェラ的位置を確認する。

そして、マリアの夢の中に置いてきた”印”をたどるが、相変わらず正確な位置が

つかめない。仕方なく、マリアとアンジェラのだいたい距離を確認する。

そしてその距離に愕然とする。

その距離は、数値にして約7000キロ。ソフィアージュの前世に存在していたアメリ

カという国を横断するのと同等の距離であった。

侍女とコンタクト2

シンをアンジェラのところに転送してから数日が経ち、日が暮れそうだった。ヴァン

ペールとアルベルトは、アンジェラが王城から居なくなったことを民衆から隠すた

めに、奔走している。幸いにアンジェラは、この逃亡を除いて一度も王城から出

たことがなく、王城でも彼女の世話をしていた侍女とその警護をしていた騎士以

外にその容姿を知るものはいない。そして、正式な身代わりが見つかるまで、そ

のアンジェラの代わりとして、アンジェラの部屋にいる。そのため、城の外はおろ

か部屋の外すら出してもらえないソフィアージュは、悶々と先日のことを考えてい

た。何を考えているかというと期日以内にどのようにしてマリアとアンジェラを合

流させるかを考である。数日前にシンをアンジェラの元に送り分かったことは、マ

リアが居るエルフの村までの距離が、約7000キロあるということである。いつもの

ソフィアージュなら転送陣でちゃっちゃっとアンジェラ達をリアのところへ送って

しまつのだが、今はそれができなかった。なぜなら、それにはマリアとアンジェラ

の正確な位置を把握する必要があるからだ。シンが持っている指輪を通して、ア

ンジェラとシンの位置は大体分かるが、マリアの位置が精霊界にあるエルフの村

ということ以外分からない。先日マリアの意識下に印を置いてきたが、それは意

識間の移動であり、物理的な位置が分からない。人間界であればその印の気配

からわかるのだが、精霊界にある結界のせいで全く気配を掴めない。八方塞がりの状況に、きれいに結びあげられた髪を両手でぐしゃぐしゃにして、

ソフィアージュは悪態をつく。

「ああああ。もうっ。メンドクサイ」

そして、ふと思い出す。マリアの意識下へ移動できるなら何とかして、アンジェラ

の位置をマリアに知らせることはできないだろうか？そもそもマリアは何らかの方

法でエルフの村まで来たのだから、その方法が使えればいけるかも知れない。

そのため今アンジェラ達の位置を調べなければ。

ソフィアージュは意識を集中して、荷物入れの亜空間をたどる、

が、

急に頭が割れるような激痛が走り、意識を王城に戻される。

どういうこと？

その予想外の状況に混乱する。仕方なく、頭に痛みが走る直前までの空間に意

識を飛ばし、その様子を確認する。見た目上には何の変化もない真っ白な空間

が続いている。しかし、見えない壁のようなものが存在している。その壁にそつと

近づくとビリッと電気が走ったような衝撃が襲う。

「いったあ」

手をぶんぶんと振りその見えない壁を見やる。すると、その奥に黄色く光る何か

が写っている。さらに目を凝らすと、それはシンに持たせたイエローダイヤのネッ

クレスだった。そして、今更ながらそのイエローダイヤの効能を思い出す。

” 外敵からの守護 ”

おそらく、シンが持っている間は、ソフィアーヂュは外敵と判断されなかったので、

” 荷物入れ ” の亜空間をたどることができた。でも、アンジエラが装着しているのだ

ろう。彼女はソフィアーヂュにあったことがないため、外敵と判断されてしまったの

だ。意識を再び王城に戻し、ソフィアーヂュは大きくため息をついた。

アンジエラ様の位置も分からなくなってしまった。

どうしよう。

ここで落ち込んで仕方がないので、マリアと接触してみよう。

何かしらの解決策が見つかるかもしれない。

一縷の望みを賭けてマリアのところへと意識を飛ばす。

白い何も無い空間に再び訪れる。そして、今回はすぐ目の前にマリアが居た。

「こんばんは。マリア」

「こんばんは。ソフィ。今回はどういった用件でしょうか？」

ソフィアージュの突然の登場に驚くこともなくマリアは淡々と用件を尋ねた。

「アンジェラ様のところに騎士の………シンを送ったから、報告しに」

あぶない。危つく名前が出てこないところだった。

『途中で、何かを思い出すように唸っていたような』

マリアの心の声だ。ということは、今度も夢の中なのか。

「そうですね。ありがとうございます」

お礼を言うマリアから直接的に安堵のような感情が流れ込んでくる。

『これで、また魔物に襲われても大丈夫だろう』

マリアの心の声に、冷やりとする。

アンジェラ様とマリアが別行動になった理由って、

まさか魔物のせいじゃないよね？

だとしたら、マリアはかなりやばい状態なんじゃないの？

当初の目的を忘れそうになって、邪推をやめる。

「それと、シンを送ってからわかったんだけど、アンジェラ様からエルフの村まで

かなり遠いから、マリアの方から迎えにいけない？」

「それは、難しいですね」

その返答にソフィアージュは、落胆する。

そして、マリアの心の声に絶望する。

『おそらくアーデスあたりに言えば、協力してくれるだろうが、アーデスはアンジェ

ラ様を知らない。マリアが探索をすればいいのだが、人並みの魔力では、200

メートル四方の探索が関の山である』

手詰まりを確定されてしまった。

しかし、たとえこの状況が手詰まりであっても、その状況をマリアに教え絶望させる必要はない。

そう思い、ソフィアージュはあえて軽く言う。

「んー。そっか。困ったなあ」

しかし、その表情はかなり険しくなってしまった。

「何か問題があるのですか？」

その表情のせいでマリアに問い返されてしまった。

言うべきだろうか。かなり絶望的な状況である。しかも、私自身は何の手も持って

いない。先程、マリア自身も手がないと、考えていた。でも、”アーデス”なら、探

索できるかもしれないとも考えていた。その”アーデス”が何者か分からないけれ

ど、マリアは信用しているし、アンジェラ様の魔力の特徴さえ教えればなんとかな

るかもしれない。私から接触するのはむずかしいけど、印を見えるようにすれば

気付くかもしれない。何もしないよりは試す価値はある。なら、マリアにはある程

度のことを伝えなくては。

数十秒の内にそこまで考えたソフィアージュは、マリアに事実を伝える。

「アンジェラ様からマリアのいるエルフの村まで、馬に乗って、

半年はかかる距離なんだよね」

その言葉にマリアはうつむき唇を噛む。そして、ソフィアージュにマリアの絶望が

流れ込んでくる。そのあまりにも強い感情に、ソフィアージュは話すべきではな

かったかもしれないと思った。しばし沈黙が続いていたが、ふとマリアの絶望の

流れが止まりとんでもないことが判明する。

『亡くなった左腕を直すための条件にハーフェルフになるといってものがあった。』

えっ、マリアは左腕を失ってるの？

しかも、それを治す条件がハーフェルフになること？

ほんの少し前に邪推した、魔物に襲われて別行動になったとう予想はあたっていたい

たらしい。あまりいい状況ではなさそうだとは思っていたけど。

「ソフィ、あの、もし、私がハーフェルフになれば、どのくらいの魔力をこの身に

宿せますか？」

こげ茶の瞳がまっすぐとソフィアージュをとらえている。

「えっ、マリアがハーフェルフ???」

予想していなかった質問に思わず問い返す。

「はい。ハーフェルフです」

何か考えがあるのだろうか。そうだとしても、さっき聞いた心の声からすると、

あまり、いいことのように思えない。

それでもソフィアージュは、まっすぐに見つめ、答えを待つマリアにきちんとした

答えを返す。それが正しいような気がしたからだ。

「マリアなら、かなり強くなるだろうね。マリアの魔力は、澄んだ藍の単一色だけだ」

ら、エルフの体は、かなり相性がいいはず。使える魔法は、風と水の魔法に限定

されるだろうけどね」

そう、マリアは珍しい単一色。

むしろ何故、人間に生まれてきたのか不思議なくらいだ。

グニャリつと空間が歪む。

ああ、マリアが誰に呼ばれてるみたい。

「ああ、もう戻らなくちゃ。マリア。私はあなたが何をしようとしてるかはっきりとは

わからないけど、無理だけはしないでね」

マリアのことは心配だったが、仕方なく意識を王城に戻した。

戻り際に印に気付くように少しだけ自分の魔力の残滓を置いていく。

ふと、ソフィアーージュが窓の外を見ると、既に日が沈んでいた。

状況報告

てきばきと少し遅めの夕食が準備される。相変わらず城内は、アンジェラの失踪

の件で慌ただしい。マリアとの接触を終えたソフィアーヂュは、考えていた。エル

フはマリアに残してきた印に気付き、こちらに接触してきてくれるだろうか。マリア

との接触の中にでてきたアーデスという人物は、本当に信頼に足る人物なのか。

悶々と考えているうちにいつの間にか夕食の準備は終了していた。今日の夕食

は、食べやすくスライスされたパンにポタージュ、そしてワインで煮込まれた肉

だった。王族の食事とはおおよそ思えない仕様になっているのは、ソフィアーヂュ

が頼んだためだ。豪華な食事はあまり好きではない。ましてや、独りで食べる食

事が豪華であればある程、虚しくなってくる。ソフィアーヂュは、ふと疑問に思う。

何で私はこんなに一人で食事をするのが嫌いなんだろう。そして、走馬灯のよう

に記憶がよみがえる。それは前世の記憶。寺島聡であった時の記憶だ。高校生

のころから付き合っていた彼氏が社会人になると同時にがんで亡くなり、落ち込

んで再起不能になっていた2年間に食べた一人の食事。その時の何とも言えな

い喪失感。嫌なことを思い出した。まだ手をつけていない食事を見つめながら、

独り微笑む。コンコンっとノックの音がする。

「失礼するよ。ヴァンペールだ」

「どうぞお入りください」

扉を開き、部屋に入ってくる。

「おや、食事中だったか。すまないな」

ヴァンペールはその言葉とは裏腹に、正面の椅子に座る。

「いえ、お気になさらないでください」

本当はさっさと帰って欲しいが、そんなことは口が裂けても言え

ない。

食事をしようと手に持っていたナイフとフォークを置く。

ヴァンペールに視線を向けたソフィアージュは、少しばかり驚く。

いつものように身なりはきちんと整えられてはいるが、青い瞳の下にはクマがで

きおり、その服は数日前に会ったときと同じものだ。

「ヴァンペール殿下は、本日の夕食は済まされましたか？」

正面切って、眠っているのか、あまり無理をするな、と言うと調子に乗りそうな気

がしたので、とりあえず食事について聞いてみることにした。

「いや、まだだ」

「では、一緒にどうですか？」

その提案に驚きのあまり青い瞳は見開かれている。

「一人での食事はどうも好きになれません。付き合っていただけま
せんか？」

見開かれていた瞳は、細められる。

「それでは、お言葉に甘えるところです」

そう言ってヴァンペールは侍女に夕食を持ってくるように言いつけていた。

ほどなくしてヴァンペールの夕食の準備が整った。

何故かそのメニューは私の物と同じであった。

「同じメニューなんですね」

疑問をそのまま言葉にする。

「ああ、その方がいいだろう。せっかく一緒に食べるのだし」

その瞳にはいつぞやの時と同じように妙な色気が込められている。

やっぱりやめておけばよかった。

「そうですね。それで用件はなんですか？」

冷めてしまった肉を口に入れる。

冷めてもおいしい。やっぱり高い肉は違うな。

「ああ。君の方の進捗状況の確認とちょっとしたお願いをしに来たんだ」

完璧なテーブルマナーで食べるヴァンペールは、とても気品に溢れている。

これでもう少しまじめな性格をしていたらよかったのに。

「お願いですか？」

「ああ。その前にソフィの進捗状況を聞きたい」

お願いが気になるところだが、先だろつが後だろつが状況が変わることはないだ

ろつ。正直あまり芳しくないなので、話したくないけど。まあ伝えな
いとだめだよな。

ソフィアージュは覚悟を決めて淡々と説明していく。

アンジェラとシンが合流したこと。マリアとアンジェラが別行動を
とっており、その

原因がおそらく魔物であること。マリアがエルフに助けられ、エル
フの村にいるこ

と。そしてそのエルフの村までの距離が恐ろしく遠いこと。その上、
マリアはアン

ジェラを迎えに行けず、ソフィアージュがアンジェラをエルフの村
まで連れて行くこ

ともできないこと、そしてその対策についても伝える。

一通り話し終わるとヴァンペールは難しい顔をしていた。

「そうか。今は連絡待ちということか」

「そうですね。その連絡も来るかどうか怪しいところですが、連絡が来なかったときは、直に精霊界に行くしかないだろう。」

「連絡がなかった場合の対策は考えているのかい？」

「はい。その時は直接精霊界に赴きます。幸い、情報はアンジェラ様の魔法陣に

ありますから」

「行けるのかい？」

「制限はかなりありますが、いけるとは思います。」

あまり得策ではありませんが」

アンジェラが転送されてそれほど時間が経っていないことを考えると、結界の一

部はもろくなっているだろう。そこからならおそらくは入れるだろう。でも、入った後

にアンジェラを探し、その上でマリアも探さなければならぬ。アンジェラ達よりは

幾分条件がましなだけで、時間がかかることに変わりはない。その上、おそらくは

入れるのは、私の精神のみになる。最悪マリアにもアンジェラにも
気づかれない

可能性がある。

「そうか。その件に関しては私は何もできない。

すまないが君の方でもう少し頑張ってはくれないか」

申し訳なさそうに言うヴァンペールに少しばかり心苦しくなる。

もとはと言えば、アンジェラにイエローダイヤのネックレスを持た
せたのがいけな

かったのだから。渡さなければもっと早くことは進んだはずなのに。

「はい。もとよりそのつもりです。それで、お願いごととは何です
か？」

とりあえず進捗状況の報告を終えて、ヴァンペール殿下のお願いごと

へと話題を変える。長いこと話しているうちに食事を終え、侍女た
ちがせつせつと

片付けている。

「アンジェラの身代わり役が決まったのだが、容姿があまり似てい
なくてな」

「アンジェラ様の世話をしていた者たち以外は、その容姿を知らないのではない

のですか？事実、私が代わりにを務めているわけですし」

「ああ。基本的にはそうだ。だが、絶世の美女であることは有名なんだよ」

なるほど。髪の色も瞳の色も知らないが、”絶世の美女”であると噂されているわ

けだ。たしかにそれは、ある程度の美人が身代わりを勤めなければいけないか

も。絶世の美女である必要はないけど、噂に尾ひれがついて絶世の美女になっ

たと言える程度の美人である必要があるということね。

「それで、その噂になる程度の美人に見えるようにしてほしいのですか？」

その質問にニコリとほほ笑む。

「察しが良くて助かるよ。影武者は確かにアンジェラの仕草や癖をうまく真似てい

るんだが、容姿は噂になるほどではないのだよ。どうにか出来るかい？」

「出来ることには出来ませんが、なぜ容姿を考慮されていないのですか？」

影武者という大役を務める人に、”容姿がちよっと。。。 ”なんて随分手前勝手に

ひどい話だ。その気持ちが顔に表れていることに気付かないソフィアージュ。

半眼になっているソフィアージュに苦笑しながら答える。

「ソフィの言った通り、アンジェラを知っているのは一部の人間だ。そして、今回の

事情を知らせた上でその役目を果たせる少女はほとんどいないだろう。城下町

で探してもいいが、そのことで感づかれては厄介だ。とくに柱であるアンジェラに

関してはね」

要するに選べる対象が少ないから仕方なかったと言いたいのだろうか。それでも

かなり勝手ではあると思うが。納得しない気持ちを無理やり押し込める。ここで憤

りを感じても代案を出せない限り、何も発言すべきではない。

「おっしゃりたいことは分かりました。明日中に作ってきます」

食事の片づけが済まされ、いつの間にか紅茶が用意されていた。

その香りに心を落ち着ける。

「ありがとう。感謝するよ」

目を細めほほ笑むヴァンペール。

「感謝するのは全て終わった後にして下さい。

その時にがっぽり謝礼を頂きます」

「そうか。では、そうするよ。長居し過ぎたな。そろそろ仕事に戻るよ」

そう言つとヴァンペールは席を立つ。

ソフィアージュは言い忘れていたことを思い出し、ヴァンペールを引きとめる。

「ヴァンペール殿下。申し訳ないのですが、黄色の宝石、イエローサファイヤかシ

リトン・クォーツのピアスを一組、用意していただけませんか」

ソフィアージュのお願いに口の端が上がる。

「それは、プレゼントの催促かな？」

ヴァンペールの発言をにべもなく否定する。

「からかわないください。ヴァンペール殿下に頼まれた

”身代わり”の魔法陣に使用するんです」

漆黒の瞳は、からかいに対しての怒りを映し出していた。

「そうか。それは残念だ。明日の午前中に宝石商をそちらによこすよ。」

好きなものを選ぶと良い」

柔らかそうな頬は、怒りで上気している。

「アンジェラ様の身代わりである私に直接、

外部の人と接触して良いのですか？」

その声には避難の意志が込められている。

「大丈夫さ。その宝石商は、アンジェラを知っているし、

事情も知っている。だから、君が好きな宝石を選ぶと良い」

なぜだかその声音は、恋人に宝石を贈るような甘さが含まれていた。

その甘さに、どきどきする。

「わかりました。では、魔力を長く保持できる宝石を選ばせて頂きます」

プイツと横を向き、気のない返事をする。

その頬には先程のからかいに対しての怒りではなく、

別の原因によって上気していた。

「それでは失礼したね。アンジェラ」

その言葉に振り向くソフィの頬にチュツと軽いキスをして、

ヴァンペールは部屋を出て行った。

「~~~~~っ／／／／」

驚きのあまり声にならない。

少しでも同情して、食事なんて一緒にとるんじゃなかった!!

こっんの好色皇子めっ!!

アンジェラの身代わりを務めるソフィアージュをからかうためにわざわざ、アン

ジェラと呼び、如何にも妹に挨拶するが如くキスをしていったヴァンペールに悪態

をつくソフィアージュであった。

ついていない夜

先程までいたヴァンペールに心の中で悪態をついていたソフィアー
ジュは、

ふと後ろの気配を感じ振り返る。そこには、若葉色の髪に金色の瞳
をもつ長身の

女性が立っていた。一瞬、訳が分からず思考が停止するが、特徴的
なとがった

耳を見て、確信する。マリアを保護したエルフだ。その顔には、ヴ
アンペール殿下

を彷彿とさせるような、からかいの笑みが浮かんでいる。さきほど
まで、ヴァン

ペールにからかわれていたソフィアージュは、意識せずいきつい口
調になる。

「いつからそこにいたの？」

その言葉にさらに笑みを深める。

「ふむ。頬を赤く染めて扉を眺めていたあたりかの」

にやりと口を曲げるエルフに、ソフィアージュは苛立つ気持ちを

落ち着けようと息を深く吐く。

「そう。とりあえず、座っていいかな？」

立ったままだと疲れる。

ましてや今日は狐を2匹も相手しなければいけないみたいだし。

「そなたの部屋じゃろう好きすればよい」

その言葉に同意して、ソファに体を預ける。

ふわふわのソファが優しく体を包む。

その心地よさに少々ささくれ立った心が治まる。

「驚かぬのじゃな」

その金色の瞳は、つまらないと言いたげだ。

「そりゃ、自分で用意した道筋を通ってきた人なんだから驚く必要もないでしょ」

エルフはその言葉にさらにつまらなそうな表情をしている。

ソファに癒された心が再びささくれ立っていくのを感じる。

「まあ、予想以上に早い連絡には驚いてるけど」

再び苛立ってくる心を落ち着けるため、深く息を吐く。

「そうじゃな。確かに少し早すぎたかの。」

久しぶりに外界のものと話せるものだから、はしゃいでしまったな」

エルフが長命なことは有名だが、それが実際にどれくらいの年月なのかは定か

ではない。ただ、その時間が想像もできないほど長いものであることは予想がつ

く。人間である私には関係のない話だけれど。

気のない返事を返し、重苦しい結い上げられた髪をほどく。

その重さから解放され、少しばかり気が楽になる。

その様子を見ていたエルフは、不思議なことを言う。

「随分興味なさげじゃな。同じように長き時を過ごしたものであるとして、

同意してもらえと思ったのじゃがのう」

確かに前世の記憶はあり見た目以上の精神年齢ではあるが、気の遠くなるよう

な年月を過ごした覚えはない。そのことを伝えると、エルフは何やら意味ありげに

微笑む。金色の瞳は、じつとこちらを見つめていた。

そして、エルフはふと目を瞑り、本題に入る。

「そうか。それは失礼したの。して、次元の魔女よ。」

エルフの長であるわらわに何用じゃ？」

妖しげな笑みを浮かべてエルフは尋ねる。窓から夜風が入ってきて、開かれてい

る本がぺらりとページをめくられる。それにも関わらず、精神体であるエルフの髪

は微動だにしない。その様子が余計に妖しさを際立てている。

「まずは、お礼かな。マリアを保護してくれてありがとう。で、ここからが用件。」

マリアと共に精霊界に行ったアンジェラを迎えに行つて欲しいんだ。アンジェラの

情報については渡すからお願いできないかな？」

簡単をお願いしているが、内心は縊るような思いだ。マリアとアンジェラを合流さ

せるための案が他に浮かばないのだから。しかし、そんなソフィアー
ージュの思い

は打ち碎かれる。

「それは出来ぬな」

即答するアーデスに思わず避難の声を上げる。

「なんで？あなたほどの魔力なら簡単でしょ？」

しばし逡巡してからエルフは、ソフィアージュを黙らすには

充分すぎる一言を放つ。

「それは、そなたが一番分かっているのではないか？」

人間界からシンに預けた”荷物入れ”の空間をたどっていったときに、少しだけ予

想はしていた。私がアンジエラに渡したイエローダイヤのせいで、アンジエラが味

方だと判断しているもの、または視覚的に認識できる範囲にいる者以外彼女た

ちの気配を察知することはできなくなっているのだから。

「はあ、やっぱりそうなるよねー」

投げやりな気分で、言葉を発する。いつの間にか前のめりになっていた体を勢い

よくソファに預ける。ポフンッとソファは小気味のよい音を立てる。

気持ちを立て

直そうと大きく伸びをする。そして、ふと思い出す。そういえば、
マリアの左腕の具

合はどうなっているだろう。とりあえず、合流のことは置いて
マリアの状態で

も聞くか。

「まあ、いいや。何とかなるでしょ。

あとさ、ついでに聞きたいんだけど、マリアって左腕なくなったの
？」

自分で言うっておきながら、何とも無責任だなと感じていると、

エルフが急に声をあげて豪快に笑いだした。

「なっ．．．なに？」

そんなに声をあげて外に聞こえないだろうかと心配するソフィア―
ジュだが、精神

体であるアーデスを認識できるのはある程度魔力が備わっているも
のだけだ。

少なくともこの王城では、王族以外はアーデスを認知出来ないので、

この心配は杞憂である。

「いや、久しぶりに声を出して笑ったわ」

ひいひい言いながらその金色の瞳には涙が溜まっていた。

何だか馬鹿にされているような気がして面白くない。

しばらくして、笑い終えたエルフは、ソフィアーージュに問う。

「そうじゃな。そなたは、マリアにどこまで聞いたのじゃ？」

「んー。左腕を治すためにハーフェルフなるっていうのは知ってる」

実際にきちんと聞いたわけではないが、マリアと接触した上で伝わった感覚を整

理してはつきりしていることである。何だか嘘をついているようにいい気分でない

が、この際仕方ない。

「そうか。では、言うても問題ないの」

そう言ってアーデスは説明をする。マリアが魔物に襲われているところを助けた

こと。そのときすでにマリアは左腕を食いちぎられ瀕死の状態であったこと。その

マリアを保護して今は元気であること。そしてなくした左腕を治療

するためにハー

フェルフになるという条件を飲んだこと。なんというか、予想はしていたけど、実

際に言われると、なんだかなあ。おそらく、マリアがハーフェルフになれば、アン

ジェラの居場所を掴むことが可能だろう。マリアはアンジェラにとつては完全な味

方ただし、今日の前にいるエルフに力を借りれば、アンジェラを迎えに行くこと

もできるだろう。少し人任せな気がしなくてもないが、上手くことは運んでくれそう

なので良しとするか。説明を終えたエルフにお礼を言うと、エルフは、気が向いた

ら連絡すると言い、消えた。

はあ。まさか一晩で似た者同士にからかわれる羽目になるとは、ついてないな。

どっと疲れを感じたソフィアージュは、さっさと寝巻に着替えていつもより少し早め

に眠りについた。

振り回されてるのは？

砂と岩ばかりの荒野が広がっている。

その中を茶色の髪の少年と黒の髪の青年、そしてその二人に守られるように金

髪の少女が歩いている。その後ろを深紅の髪を持つ男が歩いている。

場面が変わる。深紅の巨大な狼が狂ったように吠えている。その狼に対峙す

るように黒の髪の青年が立つ。そしてその後ろで気を失っている金髪の少女を

茶髪の少年が大事そうに抱え込んでいる。

深紅の狼は、炎を吐きし、辺り一面が炎に包まれ、焼失した。

場面が再び変わる。

深紅の髪の男は、焼失したその光景に膝をつき呆然としている。

その手には銀色の毛が握られていた。

「順番を間違えたみたい。精霊界の前に魔界を尋ねて魔王に会って」

何処からともなく声がした。

がばりつと勢いよく体を起こす。

外では、鳥がちゅんちゅんと会議をしている。

朝日がソフィアージュを照らし、掌の汗がてらてらと光っている。

また、夢を見た。でもその内容は思い出せなかった。前世の記憶の夢とは違い、

思い出すことができない。ただ、「魔王に会わなければ」と強く思う。この思いは、

夢の残滓のようなものなんだろう。どうしたって思い出すことのできない夢のこと

を考えるのをやめ、今やるべきことを整理する。昨日、ヴァンペー
ルに頼まれた”

身代わり”の魔法具の作成と後は身代わりの娘との打ち合わせかな。
今日その

娘に会わせてもらえるのかはわからないけど、とりあえず今日中に
すべきことは

このくらいだ。空いた時間は、魔界に行くための手立てと準備につ
いて考える

か。今日すべきことを決め、呼び鈴をならして侍女を呼ぶ。一通り

の身だしなみを

終える。今日のお召し物は、茶色の生地を基調としたドレスで、華美にならない

程度に花模様があしらってある。ちなみにコルセットは断固拒否したためつけて

いない。ほとんど衣類を持ってきていないソフィアージュは、アンジェラの服を借り

ているのだが、コルセットがなくともきつい腰に少々悲しくなる。決して太っている

わけではないんだけどなー。アンジェラより大きい胸が若干の救いだろうか。

支度が終わり、部屋を出ようとする侍女を引き留め、片手間で食べられる朝食を

お願いする。ここにきて1週間が経とうとしている今、そのことにうるさく言うことは

なくなった。初めのうちは、それこそ”行儀が悪い”だの”淑女として”だの言われ

ていたが、まったく取り合わないソフィアージュに諦めたのか文句を言うもの全く

居なくなった。それは本来なら悲しむべきところなのだが、面倒な

ことをしなくて

済むという気持ちの方がソフィアーージュには大きかった。頼んだ朝食は、サンド

ウィッチと簡単なスープだった。ソフィアーージュはサンドウィッチを頬張りながら、

ガリガリと魔法陣をかき、その中に情報をたしていく。

金髪の髪に碧眼、そして弓なりの眉に筋の通った鼻。

ぷっくりと膨らんだ柔らかかそうな唇にほんのり上気した頬。

長すぎないまつ毛。ちょうどよいサイズの胸に綺麗な曲線美を描くくびれに、脚。

大きすぎないけれど、やわらかそうなお尻。

その情報を魔法陣に描きたしていくうちに、ソフィアーージュは何だかみじめに感じ

るのであった。少しの癖のついた黒髪に、真っ黒な瞳。お世辞にも美人と言え

ない自分の顔と絶世の美女であるアンジェラ。何で、私が身代わりをしている間

は、容姿について触れられないのかなあ。やっぱり、部屋から一歩も出ないって

いう約束の上に成り立ってるんだろっとなあ。なんとなく重苦しくなる心に喝を入れ

てさっさと魔法陣を完成させる。

「やっとできたー」

グーッと腕を伸ばす。体重が椅子の背もたれに予想以上にかかり、倒れそうにな

る。寸でのところで体制を立て直し何とか転倒を免れる。

「ふう。あぶない。あぶない」

コンコンとノックの音と共に侍女の音がする。

「宝石商の方が到着いたしました。入ってもよろしいでしょうか」

その声に席を立ち、扉の方へと向かう。

「どござ」

扉が開き宝石商が部屋に入ってくる。

きちんとしたスーツ姿で入ってきた宝石商は、ソフィアージュが予想していたより

も若かった。恰幅のいいおじさんを想像してたんだけどな。

なんとなくがっかりするソフィアージュは、気持ちを奥面も出さず出迎える。

「ようこそ、いらっしゃいました。ご足労に感謝いたします」

にこりとほほ笑むソフィアージュに宝石商も微笑み返し、挨拶をする。

「お招きいただきありがとうございます」

その後適当に挨拶を済まし、ソフィアージュは宝石商が持ってきた、シリトン・

クォーツのピアスを選ぶ。そのピアスを受け取り、そのまま帰そうとすると宝石商

は何やら、小箱を取り出しソフィアージュに渡す。

「ヴァンペール殿下からでございます。どうぞお受け取りください」
どうせ贈るなら直接本人が渡せよ、

と思うものの宝石商に罪は無いので素直に受け取っておく。

「ありがとうございます」

にこりとほほ笑み受け取ると今度こそ宝石商は、部屋を出て行った。

確実に宝石商が帰ったことを確認した後、

ソフィアーヂュは先程完成させた魔法陣を机から取り出す。

そしてその魔法陣をシリトン・クオーツのピアスに埋め込む。

その様は、一見するとただソフィアーヂュが魔方陣片手にピアスを握っているだ

けだった。しかし、いつの間に手に握られていた魔法陣は消滅しており、ピアスだ

けがその手元に残っている。

ふうつとソフィアーヂュは大きく息を吐く。

さて、魔法具の作成は終わったが、直接ヴァンペールに渡しに行くべきか。

それとも侍女にお使いをお願いするか。

今回の魔法具は、確実にヴァンペールに渡さなければいけない。

人づてに渡して、紛失されては問題だ。

そこまで考えてソフィアーヂュは直接渡しに行くことにする。

その方が確実だし、魔法具の説明もできる。

来てもらってもいいが、昨夜のようなことがあつては困る。

頬に手をあてながらため息をつく。そしてその時の感触を思い出す。

フワリと柔らかい感触が触れ、二コリを微笑んで出て行ったヴァンペール。

そこまで思い出して、心臓の鼓動が高鳴る。

うわー！。何思い出してんのー！。

忘れる自分。落ち着け自分。

一人で顔を真っ赤にしながら、目を瞑り心を落ち着ける。

だんだん落ち着いてくる心音に瞼を開く。

机の上に置いてある小箱が視界に映る。

そう言えば、ヴァンペールの贈り物とか言ってたな。何だろう。

小箱を手にとり、開けようとしてふと気付く。

畏の可能性もあるんだよね。一応。

ピアスを届けるついでに聞いてみるか。

小箱とピアス”荷物入れ”に入れて、ヴァンペールの書斎へと向かった。

幸いヴァンペールの書斎に向かう途中、誰にも会うことはなかった。

目の前にあるドアは、質素なものだが、よく見ると細かいところに装飾が施され、

上品な仕上がりになっている。ドアの鉄のプレートには、書斎とだけ書かれてい

る。ドアの質素さつと相まって、その地味さ加減に拍車をかけている。そのプレー

トもよく見ると上品な装飾が施されているが、ぱっと見の地味な印象は取り消せ

ない。何て言うか、あまりヴァンペールのイメージではない。どっちかって言うとア

ルベルトっぽいよなあ。ドアをまじまじと見つめているソフィアー
ジュ。

「こんなところで何をしているんだい？」

書斎の中にいるかと思っていた人物がそこにいた。

「昨日頼まれたものができたので、届けにきました」

「そうか。立ち話もなんだし、とりあえず中に入ろうか」

ヴァンペールに促され、書斎へと入り、そのままソファに座らされる。

ヴァンペールはすぐに座らずに、お茶の準備をしている。

「それほど長居するつもりはないので、構わないでください」

王族に茶を入れてもらうなんて、そんな面倒が起きそうなことはやめてほしい。

「相変わらずつれないな。さっきまで狸たちと腹の探り合いをしていたんだ。」

「少しくらい付き合ってほしい」

本当に疲れたように言うヴァンペールに同情する。

昨夜もそのせいで不覚をとったソフィアージュだが、すっかり忘れてる。

「わかりました。私でよければお相手します」

「コーヒーでいいかい？ここには紅茶置いてないんだ」

「別に構いません」

手際良くコーヒーを入れ、ソフィアージュに出す。

向かいのソファに座り、コーヒーを口に含むヴァンペール。

その様に絵画を見ているような錯覚をするソフィアージュ。

黙っていれば本当にいい男なのに。

ヴァンペールを見ながら、コーヒーを口に含む。

久方ぶりのコーヒーに気持ちが悪く。

「砂糖やミルクは必要なかったかい？」

ヴァンペールは机の上に置かれた砂糖入れに視線を送り、尋ねる。

「はい。このままの方が香りがするので、結構です」

ヴァンペールはソフィアージュの返答に嬉しそうに微笑む。

なんだ？ヴァンペール殿下は無類のブラック好きなのか？

ヴァンペールの反応に明後日の方向に思考を走らす。

「それで、君の持ってきたものとはどんなものかな？」

ソフィアージュは、「荷物入れ」からピースを取り出す。

何も無いところからいきなり現れたピースに、ヴァンペールは驚く。

「それは一体どこから出てきたんだ？」

その質問に荷物入れの説明をした時にヴァンペールは

いなかったことを思い出す。

「適当な亜空間を作ってそこに荷物入れとして使ってるんです」

面倒だったので、かなりざっくりと説明する。

その説明に、ヴァンペールは疲れた様に「そうか」とだけ答えた。

ここ数日ソフィアージュとあまり時間を過ごしていなかったヴァンペールは、その

答えにこの少女がアルナートの魔女であることを不意に思い出す。

取り出したピアスを机の上に置き、使い方の説明をする。

「このピアスは、着けるだけ充分です。魔力も特に必要ありません」
ヴァンペール机の上にある宝石箱に入っているピアスを一つ手にとり、

観察している。何て言うか何も知らなければ、

恋人に贈る宝石を品定めしているようだ。

「ちなみに魔力はその宝石の魔力を利用しています。魔法陣はどちらにも組み込

まれているので、万が一方をなくしても機能はするようになって
います。悪用防

止のために、最初に装着した人以外には効力はありません」

観察していたピアスを丁寧に宝石箱に戻し、礼を述べる。

「ありがとう。助かるよ。これであの狸どもを黙らせることができる」

疲れた様子のヴァンペールには、やはりうつすらとだがくまができています。

服も着替えられている。狸に会うためにわざわざ身なりを整えたのだろう。

クマもおそらくは化粧が何かで隠したのだろう。

「一つお聞きしたいことがあるのですが構いませんか？」

ゆっくりとした動作でコーヒーを飲んでいるヴァンペール。

「何だい？」

再び”荷物入れ”から、小箱を取り出す。

事なげに取り出すソフィアージユにヴァンペールは苦笑する。

その光景がいかにも異様でも、彼女にとっては普通のことだ。

「この小箱なんですけど、宝石商からヴァンペール殿下の贈りものだと
言われました。それは確かですか」

何の感情も示さずに問う姿を寂しく感じるヴァンペール。

「ああ。確かに私が頼んだものだ。気に入らなかつたかい？」

ヴァンペールの返答に内心困るソフィアージュ。

王族の贈りものとか厄介以外の何物でもない。

でも、断つたらそれはそれで面倒そうだ。

「いえ、そういうわけではありません。直接ヴァンペール殿下に頂かなかつたの

で、何かしらの罫の可能性もあると思って、魔法具のついでに訊ねたんです」

その返答に綺麗な藍の瞳はまんまるに見開かれ、それから愉快そうに笑う。

その反応に馬鹿にされたと思ったソフィアージュは、むっとする。

「何ですか。何がそんなに面白いのですか？」

「いや、すまない。ソフィ。君は本当に用心深いだな」

昨夜もこんな感じでエルフに笑われた気がする。

多分このヴァンペールとエルフは気が合うに違いない。

「君の屋敷で部屋を訪ねたときは、扉を開けたままであつたし、

今回だって罫を疑つてすぐに小箱の中を確認しなかつた」

先程の笑みは消え、至極真面目な表情で言う。

「それは褒め言葉ですか？」

「ああ。」

フワリと甘い笑みを浮かべる。

その笑みにどくんと胸が鳴った気がした。

頬を染めて、ツイツと視線をそらすソフィアージュにヴァンペールは、

さらに笑みを深めた。

「少しは信用してもらってるのかな」

いきなり何を言うのだとヴァンペールに視線を戻す。

ソフィアージュがこちらを見たのを確認し、その視線を一瞬ドアの方へと移す。

そういえば、昨夜も今回もきちんとドア閉めてたな。でもそれは．．．。

「話の内容が内容ですから、開けたままには出来ないでしょう」

にべもなく返答する。先程まで染めていた頬はすっかり戻っている。

「そうか。私は、ますますソフィに魅かれていくのだがね」

先程の柔らかい甘い笑みではなく、妖しい色香が放たれた笑みだ。思わずその碧眼に引き込まれそうになるが、

その瞳にからかいの色が浮かんでいるのに気づき、席を立つ。

「用はこれで終わりです。多忙なところに失礼しました」

再び頬は上気しており、その様子がヴァンペールを喜ばせているのだが、

そんなことを知るはずがないソフィアージュは

さっさと書斎から出て行くこととする。

グイツと腕を掴まれる。

「何ですか？」

半眼になって睨むソフィアージュに微笑みながら言う。

「忘れものだ。さすがに贈り物を突き返されるのは、心にくる」

ソフィアージュの腕を掴んでいる手とは反対側の手には、小箱がある。

何も言わず受け取り、ぽいっと”荷物入れ”に投げ込む。

一瞬投げ捨てられたとおもったヴァンペールは、ものすごく悲しそうな表情をする。その表情に少しだけやりすぎたかな、

とソフィアージュは反省する。

「腕、放してください」

「ああ、すまない」

ソフィアージュの願いを素直に受け入れるヴァンペール。

そのしおらしい様子に先程の行為がどれほどヴァンペールを

傷つけたか思い知り、謝罪を口にする。

「申し訳ありません。少し大人げなかつたです」

本当にすまなそうに言うソフィアージュに思わず笑みがこぼれる。

下をうつむいている少女には、その顔を見られることはなかった。

「いや、構わない。こちらこそ付き合わせて悪かつたな」

その言葉に顔をあげてソフィアージュは言う。

「いいえ。コーヒーは美味しかったです。あの、この後も忙しいのですか？」

ソフィアージュは、ここ数日間、ほとんど休んでいないだろう

ヴァンペールが実のところ心配だった。昨夜の出で立ちは、ソフィアージュが王

城に来た時のものと同じで、ところどころくたびれていたし、くつきりと目のしたに

クマができていた。それなのに、表情はどこまでも柔和で優しい。その様子は、

前世で愛した男が病気で臥せていたときに近いものがあった。

「いや、特に何も無いが」

ソフィアージュの質問の意図が汲めず困惑気味に答える。

「では、少しでもお休みください。そのままだと倒れてしまいます」

”荷物入れ”からガサガサと何かを取り出し、渡す。

ヴァンペールの視点からだとももない空間に腕を突っ込んで、

ぶんぶん腕を振ってるようにしか見えない。

「お香です。短時間の睡眠でも体力回復できるような

魔法陣が組み込まれています。これを焚いて休んでください」

フワリと甘く爽やかな香りのする香を渡し、

そのまま部屋を出て行くソフィアージュ。

ヴァンペールは手に渡された香を見つめながらソフィアージュを想う。

非常識だけれど、他に類を見ないほどの知識量をもつ黒髪の少女。

常識な外れな行動にアルナートの魔女であることを認識させられる。

その一方でからかいに対して年相応の、いや、実年齢より純な反応を示す。

その反応に子供っぽさを感じていると、ふとした拍子に実年齢以上の女性らしい

気遣いを見せる。最初はからかいながら、主導権を握っているつもりだったが、

振り回されているのは自分かも知れない。

書斎には香の甘い爽やかな香りが充満していた。

おっさん騎士

ヴァンペールの書斎を後にし、自室へと向かう。

ヴァンペールに香を渡したとき、彼は驚いたようにソフィアージュを見ているだけ

だった。始めは、ひどいことをしたお詫びに渡そうとしたのだが、
疲れた顔がどこ

となく、前世の彼を彷彿とさせ、勢いで渡してしまった。しかも、
返答も何も聞かず

に。だんだんと気持ちが冷静になるにつれて、その行為が恥ずかしく
なってくるソ

フィアージュ。廊下を歩いているソフィアージュは、また自分では
気づかぬうちに

百面相をしていた。近くを歩いていたトーマスはその様子をばつち
り目撃し、内

心、面白い奴、と思いながらソフィアージュに声をかける。

「アンジェラ様の身代わりがこんなところで何やってんだ」

低い渋い声にソフィアージュは、振り返る。

長身なヴァンペールよりもさらに高い身長に、精悍な体格のおっさ

ん騎士だ。

その深紅の瞳は、部屋を出てほっつき歩いているソフィアージュを避難している。

「もうしわけありません。ヴァンペール殿下に直接お渡したいものがありましたの

で、部屋を出てしまいました」

ソフィアージュの謝罪にポリポリと顔をかく。

おっさん騎士は何か言いたげであったが、

「とりあえず、部屋までおくる」

とだけ言って、部屋まで送ってくれた。

おっさん騎士に連れられながら、ソフィアージュは困惑していた。

今朝から、”魔王に会わなければ”という気持ちが強くあったが、おっさん騎士に

会って何故だかその気持ちが強くなっている。”何か”をしなければいけないのは

分かるのだが、それが何が全く分からない。

もやもやした気持ちのまま部屋に着く。

「次は気をつけるよ」

そう言っつてその場を去ろうとするおっさん騎士。

咄嗟に思いもよらないことを口にしていた。

「剣術の稽古をつけてもらえませんか」

私の言葉におっさん騎士は、驚きのあまり声を出す。

「はあ？」

さらに何か続けようと口を開くおっさん騎士に、

何も言わせまいとソフィアージュは捲くし立てる。

「詳しい話は、中ですます。入ってください」

深紅の瞳で凄まれるが、何とか顔に笑みを作り、部屋にいれ、椅子に座らせる。

お茶を淹れながら、これからどうやって話をまとめるかを考える。

思わず出た言葉だったが、魔界に行くのだから、自分の身を守れるぐらいの護身

術は身に付けとく必要はあるだろう。魔法は使えるが、時空間関係以外は事前

の準備が必要なため、実戦向きではない。だとすると、やっぱり稽

古をしてもらおう

方向で話を進めるとしよう。さっきから、何だか凄まじい気がするが、気のせい

だろう。うん。気のせい気のせい。準備したお茶をおっさん騎士の前におき、正面

に座る。正面に座るおっさん騎士の深紅の瞳は、凄んでいます。とても。

冷や汗がたらたらと流れるのを感じながら、ソフィアージュは口を開く。

「突然の申し出で申し訳ありません」

その場を取り繕うととりあえず謝罪を口にする。

そして、頭の中を整理しながら、話を進めて行く。

「アンジェラ様は今精霊界におり、精霊王に会うべく旅をしています」

正しくは、マリアと合流してからののだが、詳細を知らないおっさん騎士にそこま

で話す必要性はないので、スルーする。

「アンジェラ様は精霊王に会った後、人間界、または、魔界の柱に会おうとなさる

でしょう。人間界の方は、ヴァンペール殿下の方である程度手助けができるで

しょうが、魔界はそういうわけにはいかないでしょう」

おっさん騎士は黙って聞いている。

「人間とは比べ物にならない魔力を持つ魔物で溢れています。魔王に会うまで

は、外敵とみなされ攻撃をされるでしょう。残念ながら、アンジェラ様の連れで

は、到底敵う相手ではありません。そこで、先に私が魔王に会って話をつけようと

思うのです。ただ、そのためには、私自身が自分で身を守れなければ意味があり

ません。魔法は得意ですが、大変悔しいのですが、実戦ではあまり役に立たない

でしょう。そこで、騎士であるトーマス様に剣術の稽古をつけてほしいのです。も

ちろん無理は申しませんし、騎士になれるほどの稽古をつけてくれなどといった

無茶も申し上げるつもりはありません。ただ、魔界の魔物から身を

守れる程度に

稽古をしてほしいのです」

静かに話を聞いていたおっさん騎士は、脱力気味にいった。

「言いたいことはわかった。だがな、お嬢ちゃん。

自分で言ってることわかってるのか？」

自分の言っていることが矛盾しているのは知っている。アンジェラ様にはれっきと

した騎士がついている。その騎士が魔界の魔物に勝てないから、魔王に話をつ

けに行くのだ。その魔物から身を守る程度とは、要は騎士より強くなりたいたい、と

言っているのと同義だ。だが、勝つ必要はないのだ。私が守るのは私の身だけ

だ。逃げ切れればそれでいい。幸い時空間関係の魔法は得意だ。逃げる時間さ

えあれば、咄嗟の対応さえできればどうにかなる。

「分かっているつもりです。私は魔物に勝ちたいわけではありませんせん。咄嗟の攻

撃を避け、逃げ切れるようになりたいんです」

まっすぐに深紅の瞳を見つめる。

ここは絶対引かない。

口では無理を強いないと言ったが、実際は承諾してもらえないまで粘るつもりだ。

おっさん騎士は、紅茶を一気に飲み、乱暴にカップをおく。

「わかった。稽古をつけてやる。そのかわり弱音は吐くなよ」

その言葉にソフィアージュの表情はぱあっと明るくなる。

「ありがとうございます。トーマス様」

飛びついてきそうな勢いのソフィアージュに引き気味になるおっさん騎士。

「その”様”は、やめてくれ。それと敬語も。」

傭兵上がりの俺には気色悪くて仕方ねえ」

おっさん騎士の提案にソフィアージュも提案する。

「じゃあ、私も”お嬢ちゃん”じゃなくて、ソフィアージュって名前があるんだから

名前で呼んで。長くて面倒ならソフィでもいいから」

その提案ににやりと笑い、頭をごしごしする。

「わかった。ソフィ。明日の午後に訓練所に来い。場所はわかるか？」

今日は、髪を結い上げていないので、後で梳かせばいいが、

ここまで髪をぐしゃぐしゃにされたのは初めてだ。

そのことに腹が立ち、無然と答える。

「しらない。」

「んじゃ、エイダを迎えによこすから、一緒に来い」

そう言って、おっさん騎士は部屋を出て行った。

髪を梳かしながら、ソフィアージュはため息をつく。

会ったときに、騎士って言うより傭兵っぽいな、とは思っていたが、

まさか本当に傭兵だったとは。

頭をなでた手は、大きくごつごつしていた。

子供のころによく頭をなでてくれた父をふと思いだすようなそんな手だった。

王太子

おっさん騎士ことトーマスと剣術の稽古の約束を取り付けたソフィアージュは、

どうやって魔界に行くかを考えていた。精霊界と違って、特に情報がない。おそら

く精霊界と同じように陸続きでどこかに存在しているとは思うが、どのあたりを探

索すればいいのか全く見当がつかない。王城にある書庫にでも行って情報を集

めてみようかな。どれほどの情報が手に入るかはわからないけど、行ってみる価

値はあるだろう。しかし、先程トーマスに部屋を出たことを叱られたばかりだ。うー

ん。どうやって書庫まで行こう。正確な位置が分かれば空間転移で行くんだけど

なあ。うんうんと唸っていると、ノック音が聞こえる。

「びびぞ」

ガチャリとドアが開く音と共にアルベルトが中に入ってくる。

「失礼する。今時間あるか？」

おっさん騎士と同じ深紅の瞳が、ソフィアージュの方を見つめている。

「はい。大丈夫です」

アルベルトをさっきまでおっさん騎士が座ってたところに座らせる。

まだ片付けていなかったカップを下げて、新しい紅茶を用意する。

「誰か来ていたのか？」

紅茶をアルベルトの前におき、正面に座る。

「はい。トーマス様がいきました」

予想していた人物と違ったらしく、少し驚いている。

「トーマスが？何の用だったんだ？」

ソフィアージュはにこりとほほ笑み答える。

「ヴァンペール様の書齋から部屋まで送っていただいたのです。自室で特にやる

ことがなかったのです、ついでに少しだけお茶を付き合っていただけでした」

途中からは嘘だが、事実それほど違わないので、自分の中ではよし

とする。

「そうか」

あれ？ヴァンペール殿下の用件については聞かないんだ。

てっきり聞いてくると思ったのに。それとも、もう知ってるのかな。

微かな違和感を感じながらも話を進める。

「それで、どういったご用件でしょうか？」

アルベルトは苦虫でも潰したような顔で説明をする。

「本日、夜会があるのだが、同伴して欲しいのだ」

夜会？夜会ってあれだよな？貴族がいっぱい集まって、薄ら寒い褒め言葉を口

にしながら相手のほらを探り合うやつだよな？

盛大に顔を歪めるソフィアージュに、アルベルトは少し同情する。

「本来なら、アンジェラを連れていく手筈だったのだが、今回は病欠ということに

なっている。しかし、同伴なしで行くとどうも面倒だな」

珍しくアルベルトの顔も盛大に歪んでいる。

それでも、なんていうか憂いを帯びてカッコいいとか、卑怯だと思
う。

「アルベルト殿下は格好いいですからね。」

確かに虫よけがないと大変そうですね」

王族は美形揃いで卑怯だ、とは思いますが、

好きでもない異性に下心満載で擦り寄られるのは、同情にたえない。

しかも王太子となると、公に断るわけも行かないから大変だろう。

「非常に個人的な頼みですまない」

本当にすまなそうにしているアルベルト殿下を見てみると、

何だか本当にかわいそうになってくる。

「構いませんよ。でも、私などで大丈夫でしょうか。」

アンジエラ様と違って私は兄妹ではありません」

そう。アンジエラは、アルベルトと兄妹だからそれほど問題はない。

でも、私は兄妹ではない。それが意味することは、私がアルベルト
と懇意にして

いる女性という立場になるということだ。それが、一時的にせよ、
その影響力は

大きい。ましてや田舎貴族と懇意にしてるだなんて、面倒事が起きるのは目に見

えている。結界があるから実家に面倒が起きることはないだろうけど。

「それは問題ない。ソフィにはアルナートの魔女として来てもらうからな」

ええと、それはそれで問題だと思っんですけど。

「文句は言えんだらう」

いや、確かに魔力がある程度高い貴族の娘は、地位に関係なく王の側室になる

しきたりはある。世界の柱になるものをコンスタントに産む必要があるから。

でも、私魔力は皆無ですよ？

仮にアルナートの魔女だから、魔力を持った子を産める潜在能力があると仮定し

てその場に収まっているとすれば、まあ、声を大にして異を唱えるのは難しいだろ

うけど、個人的には”懇意にしている女性”って部分を否定する方向に持って行っ

て欲しい。

「アルベルト殿下と懇意である女性という立場は、否定なさらないのですね」

「ソフィは私とそう言った噂が立つのは嫌か？」

その深紅の瞳は、悲しげだ。

「アルベルト殿下は素敵だとは思いません。

ですが、その噂の影響で実家に思わぬ損害を被ることは避けたいです
すね」

アルベルト殿下のことは嫌いではない。むしろ好意を持てると思う。

誠実で気配りもできて、頭もいい。

「そうだな。確かに噂によって何かしらの損害を被る可能性は否定
できないな」

私の言った言葉を同意してるアルベルトは、

何だかほっとけないような雰囲気を出している。

何だろうこの雨の中捨てられた子犬を無理やり素通りしたような罪
悪感は。

アルベルトが泣いてるような気がして、

思わずアルベルトへ手を伸ばし、頬に触れる。

その行為に深紅の瞳は、大きく見開かれる。

そして、そのアルベルトを見て、自分が無意識にしていた行為に気付く。

「もっ申し訳ありません」

急いで手を引っ込めようとしますが、

途中でアルベルトに掴まれてその頬に戻される。

「少しこのままでいてくれ」

アルベルトの頬に触れている手に、アルベルトの手が重ねられる。

その頬も手もひやりと冷たい。

目を瞑っているアルベルトはどこことなく、小さな子供のように感じた。

しばらくして、アルベルトは瞼をあげ、まっすぐソフィアージュを見て微笑んだ。

窓から入る日差しを反射しキラキラと光る髪。

その明るい印象とは対照的にどこかほの暗い光をともしている深紅の瞳。

まだ少年のあどけなさを残すその笑みは、儂げとてもきれいだっ

「ありがとう」

そう言うとソフィアージュの手を開放する。

何に対してお礼を言われたのだろうか？

首をかしげるソフィアージュの後ろにあるドアに視線を向けて、

アルベルトは言う。

「兄上、どうやら私の負けのようです」

いきなりの発言に驚きアルベルトの視線の方向に、

振り向くとそこには、アルベルトと同じ金髪を持つもう一人の皇子が立っていた。

喰えない人

金髪の美形二人に挟まれながら、ソフィアージュは意識を遠くに飛ばしていた。

そういえば、王城に来た初日にも似たようなことあったなあ。

「出来れば、今回はお前に勝って欲しかったんだがな」

ヴァンペールの口調は、アンジェラの部屋で話し合っていた時のよう
うな

からかいはなく、余裕が感じられない。

「自分でも驚いています」

対照的に、アルベルトは、すっきりとした表情をしていた。

「今回は譲る気ないぞ」

「いつまでも、与えられるばかりの子供ではないですよ、兄上」

深紅の瞳が挑発するように細められる。

しばらく見つめあっていた二人だが、アルベルトが「用意があるので失礼しま

す」と言って部屋から出て行った。去り際にソフィアージュは耳元
で「夜会で会

おう」とアルベルトに言われ、遠くに飛ばしていた意識を現実へ戻す。部屋には

相変わらず不穏な空気が流れており、自室から避難したい気持ちでいっぱい

だったが、訪ねてきたヴァンペールを放っておくこともできず、とりあえず座るよう

に促す。アルベルトの飲みかけたカップを下げて、もう一度紅茶を入れなおす。

なんていうか今日は来客が多いなあ。入れなおした紅茶をヴァンペールに出し

て、正面に座ると同時に、ぐーっと盛大にお腹が鳴った。その音に、ヴァンペール

は肩を震わせて笑いをこらえている。

「いつそのこと声出して笑ってください」

その一言に堪えきれず声を出して笑い出す。

自分で言ったとはいえ、そこまで笑われるとさすがに不愉快だ。

恥ずかしさで顔赤くしながら、ふてくされる。

ヴァンペールはあはあっと息をしながら、呼吸を整えている。

笑いすぎでその青い瞳には涙が溜まっている。

こんな状況ですらカッコいいとか美形ってずるいと思う。

「すまなかった。．．くっ。あまりに唐突だったので」

話している途中で思い出したのか、また笑いをこらえている。

何だか腹が立つが、ここで一人怒っていても虚しいだけなので、

気持ちを落ち着けるため、自分で自分を慰めることにする。

少なくとも先程の不穏な空気がなくなっただけ良しとしよう。

むしろグツジョブだ。

恥ずかしい過去を歪曲して良い思い出としたところで、

さっさと話を進めることにしよう。

「それで、どういったご用件で来たんですか」

完全に気持ちの切り替えができず、口調が若干ながら

不機嫌なものになってしまった。

「ああ、その前に昼食をとらないか」

腹の音まで聞かれている私に断る理由はないが、その端正な顔が二

ヤニヤして

いるのは、どうにも面白くない、面白くないがそれを訴えたところで墓穴を掘るだ

けなので、ここは素直に同意をしておく。

「そうですね」

近くにある呼び鈴を鳴らすと、すぐに侍女がやってくる。どこかで待機してたので

すか、と尋ねたくなるぐらい早いご登場だ。まさか、先ほどの会話を聞いていたわ

けではないよね…。内心でそんなことを考えながら、侍女に二人分の昼食を頼

むと、「かしこまりました」といって一礼しそそくさと部屋を出て行く。ソフィアー

ジユの屋敷の執事ゴルバや侍女ヘレンと比べて、その仕草は、どこまでも機械的

で冷淡なものだ。

「それにしても、あのお香は随分と効力があるんだな」

さっさと用件を聞きたいソフィアージユだが、魔法のことになると饒舌になるため、

ついその効力について説明をしてしまう。

「あの香には、香りで充満したところの時間の流れを縮める効果があります」

「なるほど。それで、私は眠り過ぎた思っで起きたわけだ」

得心をいったという様子で話す。

「実際には、どのくらい寝たのですか？」

実はソフィアージュ自身、あの香がどれくらい時間を縮めているのか知らない。

自分で作ったのだから、本来なら分かっているからならぬとこるだが、使用

者によってかなり差が出てしまうので、はつきりとした効力を把握できない。自分

で使った時は、外界の10倍の速度になっていた。ちなみに結界の中に居る間

は、時間の流れは、体感的には、普段と変わらない。

「君が部屋を出てすぐだから、実際には2時間ぐらいだろう」

だとすると、ヴァンペール殿下がかなりのお寝坊さんでない限り、ソフィアージュ

ほど外界との時間の流れに差はないらしい。一般的な魔力の人にはほとんど効

力がなさそうだ。一人納得していると、コンコンつとノックの音がある。

「昼食をお持ちいたしました」

予想以上に早く昼食ができたらしく、複数の侍女がてきぱきと準備をしていく。

決して忙しそうにしているわけではなく、的確にすばやく作業をこなしている。ほ

どなくして、準備が終わりそそくさと彼女たちは部屋を出て行く。ここまで素っ気な

いと嫌われているんじゃないかと疑いたくなる。

「思ったより早かったな。もう少し君と談笑していたいのだが、

そういうわけにもいかなそうだな」

用件をさっさと話してほしいという私の気持ち知っていながら、話をそらしたんで

すね。普段なら、文句の一つでも言ってるのだが、いつもより少し気疲れして

いるので、スルーすることに決める。クロワッサンのようなふわふわ、さくさくした

パンを口に入れる。うん、美味しい。

「先程もアルが話していただろうが、君には夜会に出てほしいんだ」
パンの美味しさにニコニコと緩んでいた表情が硬くなる。

夜会だと？さつき断ったんだけど。って、あれ？

そういえば、アルベルト殿下が去り際に夜会で会おうとか言っていたような。

遠く意識を飛ばしていたソフィアージュはそのあたりの記憶が曖昧だった。

「当然、アルの同伴ではないよ。残念ながら私の同伴でもないのだがね」

てつきりキラキラした顔で同伴をお願いされと思っていたソフィアージュは、

予想と違う話の方向に首をかしげる。

「正式な招待状をもって、夜会に参加するということですか？」

自分で言うっておきながら、否定して欲しいと思う。

皇子たちの同伴も面倒なことこの上ないが、正式な招待となると、

きちんと手続

きして断らなければならない。私の記憶が正しければ、夜会は今日だった気がする

るんですが、記憶違いですかね。

「ああ。そういうことになる。今回の夜会の目的は、

アンジェラとその儀式に関する人のお披露目だ」

それで、アルベルト殿下の同伴がアンジェラ様だったのか。

今まで鳥がこの鳥の如く、王城から出してもらえないアンジェラ様が

何で夜会に出るのか、とは思ってたけど、そういう意味だったのか。

「それと私は、どう関係してくるのですか？」

「ソフィ、君には儀式を執行する魔術師として出てもらう」

口に含んでいたスープを思わず嘔き出しそうになるが、何とか堪え飲む。

どうでもいいが、もう少しで盛大にヴァンペールのお顔にスープをおみまいすると

ことだった。

「博識な君なら知ってるとは思いますが、柱であるアンジェラの魔力を

体を傷つけず

に、今の柱に渡すのは至難の技だ。しかし、噂になるほどの使い手である君なら

可能だろう。王城に空間転移でアルナートから来たことは有名な噂だ」

最後の一言に飲みこもつとしていた肉が肺の方に行こうとしてむせる。

「うっ、うっほっ．．うっほっ」

マナー違反だとは分かかっていても咳がとまらない。

「大丈夫かい？」

心配そうに近寄ってきたヴァンペールが水の入ったコップを渡して聞いてくる。

誰のせいだ、誰の。

ヴァンペールを一睨みしてから、水を一気に飲み干す。

要するに、実際に出来るできない関係なく、その位置に収まるには充分の噂と目

撃者がいるから、夜会に出ると？

席に戻ったヴァンペールの表情がどことなく愉しそうで、この後も

同じ状況になる

可能性があるなと判断し、話が終わるまで食事に手をつけるのやめようと決め

る。持っていたスプーンを所定の位置におき、ゆっくりと顔上げヴァンペールを

まっすぐに見据える。

「私でなくても他の方でよろしいではありませんか？」

確かにその役割をもらってもおかしくない位置あいにいることは分かったが

私である必要はない。断じてない。

「確かにこの件に関してはそうだな。でも、公にはアンジェラは失踪していないこ

とになっているし、その上で噂の君が何の憚りもなく王城を歩くには、

必要なことだろうか？」

ヴァンペールはこう言いたいのだ。何の問題もない王城に、何でアルナートの魔

女がいて、しかもその魔女が何で皇子たちと懇意にしており、王の自室に入っ

て、依頼を受けたのかと。その上で正当な理由を作るなら、噂に違わぬ実力を

持ったアルナートの魔女が王から直々に儀式の執行人に指名されて、
王城に儀

式の日までいるという理由がもっともらしい。これでは、逃げ場がないじゃない

か。というか、空間転移の件はヴァンペールが内密に処理してくれ
たんじゃな

かったのか!!この野郎!!

心の中の恨みを口には出さないが、その怒りはきちんと黒の瞳に映し出されて

おり、ヴァンペールにその意思を伝えるには十分だった。

「すまないな。私の力では君の噂をもみ消すことができなかつたんだ」

言葉とは裏腹に涼しげな表情は、全然悪いとされているようには見えない。

むしろ、とっても愉しそうだ。揉み消す必要性がなかったから、揉み消さなかつた

のだろうというこは予想がつくし、だんだんと相手にするのも疲れ
てきたため、

特に反論もせず口だけの謝罪を無視する。

「それで、私が夜会に出るのを承諾したとして何をすればいいんで
すか？」

どの道でも逃げられそうにないので、何をすればいいのかをたずね
ると、

ヴァンペールは口角を上げた。

「特にはないな。正式に発表するわけではないし、

どちらかという今回は元老院を黙らすためのものだからな」

ん？それって要するに貴族の皆様にお披露目するのは建前というこ
とで、しかも

私とその元老院もとい狸どもにご挨拶しなくちゃいけないってこと？

そこまで考えて、ソフィアージュは思いっきり顔しかめ、

思わず不満を漏らしてしまう。

「狸に挨拶は勘弁してほしいなあ」

「心配する必要はない。狸に紹介するのは私の仕事だ。ソフィ。

君は隣に居るだけで構わない」

でもそれって、結局挨拶するんじゃない。…ん？

ヴァンペールの隣にいるだけ？それって夜会で合流するってこと？

「同伴しないんですよ？夜会で合流するんですか？」

素直に疑問を口にする、胡散臭い笑みがさらに胡散臭くなる。

「もちろん、君は私の同伴ではない。私が君の同伴なんだ」

後半の台詞は、幻聴か？

「ええっと、どういう意味でしょうか？」

「額面どおりの意味だが」

にっこり笑うヴァンペールに気が遠くなっていくのを感じる。

ふらふらとする頭を抑えながら大きく息を吐く。

下ろしていた黒髪がさらりと肩をなで、白いテーブルクロスの上に広がった。

打ち合わせ？

大きく息を吸い込み、ゆっくりと息を吐いていく。深呼吸をして気持ち落ちつけ、

先ほどの質問と同じ意味だけれど、さらに具体的な質問をする。

「なぜ王族であるヴァンペール殿下が下流貴族である私の同伴なのでしょう？」

か？」

どう考えたっておかしい。そもそも、王城で行われる夜会で何で親族であるヴァン

ペールがわざわざ私の同伴としてやってくるのだ？招待状も何も要らないのだから誰かに同伴して参加する必要ないだろうに。

ソフィアージュの質問に少し驚いたように瞳を開き、

一瞬の逡巡の後に口を開いた。

「ソフィ、今の私はいつもと違うところがあるのだが、どこかわかるかい？」

何だその乙女のような質問は。今日はイメチェンでもなさったのですか、と小ばか

にした口調で言いたくなるだろうが。というか、わからねえよ。いつも通りだよ。

「申し訳ありません。私にはいつもどおりのヴァンペール殿下に見えます」

心の中の暴言はもちろん口にせず、とりあえず謝罪を述べて答えを求めると、

ヴァンペールは食事をしていた手を止める。

「そうか。どうやら君にも効かないようだな」

感心したような、呆れたような、何ともいえない表情でヴァンペールは右手につけ

ていた指輪を外し、ソフィアージュにその指輪を渡す。宝石は特についておらず、

銀の簡素な指輪だ。よく見ると細かい装飾があり、その装飾は指輪の内側にも

あった。どこかで見たことあるような……？さらに目を凝らしてその指輪をみると、

そこには小さな魔法陣が描かれており、その効能は幻視だ。ヴァンペールに指

輪を返し、小さくため息を吐く。

「それでは、私には効かないでしょうね」

その言葉にとっても楽しそうに藍の瞳が細められる。

「その魔法陣には3つの制約があります。一つ目は自分より魔力が低いものであ

ること、二つ目はその魔法陣を理解できるほどの知識を持たないこと、最後はそ

の指輪を装着するところを見ていないこと、以上全ての条件をクリアした人には、

ヴァンペール殿下が黒髪、碧眼の男前な騎士に見えるでしょう」

「なるほど。君はその2つ目の制約を満たしていないわけだな」

相変わらずその瞳は、楽しそうに細められている。

「そうだと思います。ヴァンペール殿下は今夜、

私の専属騎士にでもなるのですか？」

そうとしか思えない幻視効果が記されていた。身長はおそらく今のヴァンペール

とさほど変わらないだろうが、顔つきや雰囲気はかなり変化する。

中世的な美形

から精悍な顔つきになり、柔らかい雰囲気は硬く慇懃なものになるだろう。

「その通りだ。私は今日の夜会以降は君の専属騎士になる」

なぜこの人はいつも情報を小出しにするのだろうか。どうせなら一
気に必要な情

報を教えてほしい。いや、マジで。

「そうですね。できれば、必要な情報は小出しにせずにきちんと
教えていただきたいですね」

後が面倒なので、そのことだけきちんと伝えておく。

「すまない。では、食事を再開しながら話していくとしよう」

手を止めていた昼食を再び開始して、何度か質問を交えながら話を
聞いていく。

しばらく問答を繰り返しながらも、少し遅めの昼食が終わり、用件
を終えたヴァン

パールが部屋を出て行く。それと入れ替わりに侍女たちが入って
くる。手際よく片

づけしている侍女をぼんやりと眺めていると、後ろから声をかけら
れる。振り向く

とそこにも侍女がおり、これから夜会に向かうための準備を
言われる。もち

ろん、拒否権なんていうものはなく、数人の侍女に囲まれながら浴
室へと向か

う。湯浴みでこれでもかというほど、ごしごしと体を洗われ、その
後、着替えに化

粧にと忙しく身の回りの世話をされる。そして、数時間後にやっと
夜会に行くため

の準備が終了し、解放される。普段なら断固拒否するコルセットが
ぎゅっぎゅっ

体を締め付けて苦しい。できるだけ体に負担をかけないように背筋
を伸ばしてお

となしくソファに座り込む。侍女頭に「絶対に服装や髪型をみださ
ないように」と強

く言われているため、横にもなれない。ヴァンペールに言いくるめ
られさえしなけ

れば、こんな思いをしなかったのに、とも思ったが、怒るのさえ疲
れを感じてあき

らめる。そういえば、指輪の効能の話のときに「君にも効かないか」
って言っ

てたな。この部屋に入ってきたときにアルベルトと会話してたみたいだし、アルベ

ルトにも効かなかったのかな。ヴァンペールより魔力が高いのか、装着時に見て

いたのか、あるいは両方なのかも。一人で納得していると部屋に人が訪ねてき

た。部屋に通すと最近見慣れてきた金髪碧眼の美形、ヴァンペールだった。

もう時間なのだろうかと時計に視線を巡らす、まだ1時間近く早い。

「何か御用でしょうか？」

特になければさっさと出て行ってくれませんか、なんて仮にも王族に言えるわけ

もなく、不機嫌な声音だけでその思いを表現しようとする。

「招待状を渡し忘れたので、持ってきたんだ」

厚手の白い封筒には王家の紋章ついている。もちろん手渡しなので役所を通し

たときの董すみれの版はついていない。丁寧に封を切って中身を取り出すと

王様から直々に頂いたとは思えないほど簡素な招待状が入っていた。

そこには

「本日の夜会に招待する」としか書いてなかった。何ていうか簡素すぎません

か？この夜会に招待されたのかもわからないんですけど。

「随分簡素な招待状なんですね」

「ああ、先ほど陛下に書いてもらったからな」

聞き間違いだろうか？

”先ほど書いてもらった”って聞こえた気がする。

「今日の夜会に私が出席することは、決定事項だったのですよね？」

その質問に形の良い口が弧を描く。

「ああ、もちろん。先ほど決定したからな」

どうやら聞き間違えではないらしい。ヴァンペールが夜会の出席をお願いしている

たときは、その出席は決定事項ではなかったのだ。ということはい、私がおもつと頑張

れば拒否できたのですね。そうですね。ソフィアージュがここに居る正当な理由さ

え作れば、の話だが頭に血が上った状態では当然そのことには気づかない。

騙された！！騙されましたよ、奥さん！！

ちくしょおおおおおと叫びたい気持ちとヴァンペールをぶん殴りたい気持ち

でいっぱいになるが、冷静な自分が落ち着けと言っている。爪が食い込むのでは

ないかくらいに拳を握り、むくむくと沸いてくる怒りに耐える。

「わざわざ届けに来ていただきありがとうございますとございました」

何とか怒りを静め、もう用はないんだろう？さっさと出てけ、という思いを込めて

形だけの礼を述べる。その思いが伝わったのか、「また後で会おう」と言っつてヴァ

ンペールは部屋を出て行った。戸を見つめながら、ソフィアージュは思案する。こ

れから約1時間何をして時間を潰そうか。着慣れないコルセットのせいで集中力

が落ちているし、何より下手に動いて髪が乱れたり、ドレスが皺にができるのは

避けたい。本でも読もうかな。”荷物入れ”に手を突っ込んで取り出した本は、カラ

フルでかなり薄い。左手で頬杖をつき丁寧に表紙を開くと、アンジエラと同じ金髪

碧眼の少女が楽しそうに庭園を走り回っている。さらにページをめくるとアイリス

の乳母がこの世界に棲む恐ろしい魔物について話している。この本は子供向け

に作られた絵本で、おそらく”世界の柱”という存在を正当化するために普及さ

せたものなのだろう。ストーリーはありがちで、異世界からやってきた魔物たち

に支配されそうになった世界をまもるために主人公であるアイリスが様々な人の

手を借りて世界を救う話である。このありがちな設定だと、誰も犠牲にせずに世

界を救えそうなものだが、すでにぼろぼろになった世界の安定をはかるために若

干13歳の少女である主人公アイリスが、”世界の柱”となってその存在を概念へ

と昇華させている。私はその絵本を”世界の柱”を正当化のするために描いたの

だろうと判断した所以は、この物語の終わり方である。柱となった少女

に対して民衆や親である王ですら悲しまずに尊い存在として扱い、いかにもハッ

ピーエンドですといわんばかりの雰囲気で終わっている。この世界に生まれ、初

めてこの本を読んだときに感じた何とも言えない違和感は相変わらず顕在（けん

ざい）だ。あまりいい感情を抱けないにも関わらず、なぜだかソフィアージューはこ

の絵本が手放せなかった。特に記憶喪失というわけでもないのに、絵本を読む

たびに何か大切なことを思い出しそうな気がしてくるからだ。考え事をしてるう

ちに時間が来たらしく、再び部屋にヴァンペールがやってきた。

「おや、ずいぶんと懐かしいのを読んでいるんだな」

部屋に入ってくるなり、読んでいた絵本を手を取った。

その手には銀の指輪がついており、きらりと光を反射した。

「特にやることがなかったなので、郷愁にでも浸ろうかと思いついて」
前半は本当だが、後半はもちろん適当だ。

「私も幼い頃に読んだよ。子供心に物語のラストに疑問を持ったものだ」

絵本を返すヴァンペールの表情は、読みづらい。

「そうですね。私も違和感を感じていました」

ヴァンペールはその返答に苦笑する。おそらく、この本が純粹な絵本ではないと

いう考えは、私だけのものではないのだろう。

”荷物入れ”に再び本をしまい席を立つと、ヴァンペールが跪く。

流れるような動作で手を取り、手の甲に口付けされる。いきなりのことだ。呆然とし

ているとヴァンペールが顔を上げて、慇懃な態度で言った。

「それでは行きましょか。ソフィアーージュ様」

ヴァンペールが手をそっと放し、ドアのほうへと移動する。

手を出すヴァンペールに状況を理解し、心臓が早鐘を打つ。

その鼓動を感じながら、気を落ち着けようと自分に”これは演技”
だと言い聞かせ

る。そして、ヴァンペールが昼食で話したシナリオを思い出す。世
界の柱であるア

ンジエラの儀式を執り行う魔法使いとして王城によばれ、その身を
置いており、

本日の夜会は儀式に関係する者たちを貴族やら元老院やらに顔みせす
るためのものだ。そこで、顔見世をすることで色々と危険が伴うよ
うになるから、

専属騎士が期間限定でつく。その専属騎士の役がヴァンペールだ。
本物の騎士

でもいいのではと思って聞いたところ、できるだけ私の面は割れな
い方がいいの

だと言われた。そこまで思い出して覚悟を決める。

「ええ、参りましょう」

少し前にいるヴァンペールの手を取り、夜会の会場へと向かう。

どうか、何事もなく夜会が終わりますように。

夜会にて

ヴァンペールに連れられて夜会の会場へと到着する。会場に入った瞬間にその

豪華さに目が眩む。至る所に施された装飾は細かく、天井につるさ
れているシャ

ンデリアはキラキラとその光を放っている。そしてその部屋の豪華
さに負けんと

着込まれているドレスは、色とりどりで華やかだ。即行で帰りたく
なるが、もちろん

そういうわけもいかないので、シャンと背筋を伸ばして会場内を歩
く。ヴァンペー

ールに誘導されて会場の中央へと連れてかれ、その誘導を終えるとヴ
アンペール

は、斜め後ろに立つ。何ていうか会場にいる招待客がじろじろと見
ている気がする

る。いや、これは絶対見てる。物色するような不躰な視線とか、何
でか知らんが

刺さるようなバリバリの敵意が込められている視線とか感じる。何
で中央に誘導

するんだよー、うっっ。内心泣きそうになるが、その弱気を怒気にかえて、斜め後ろに控えているヴァンペールを一睨みする。しかし、ヴァンペールは涼しい顔でそ

の視線を受け流し、何事もなかったように後方で控えている。多分、この位置

には理由があるのだろうけど、何も聞いていない。情報を小出しにするなど伝え

たのに、こいつはわかっているのか、わざとなのか。…間違いない。後者だろう。

これ以上考えても埒が明かないので、考えるのをやめる。後どれくらいで、招待

した王族さまは現れるのだろうと、時計を探すが会場内にはなかった。その際に

視界に入って気づいたのだが、開かれていた招待客用の扉は閉じられていた。

おそらく全員到着したのだろう。招待客同士でニコニコ笑顔浮かべながら、お互

いがお互いを褒めつつ、腹の探りあいをしている。その内容は根底は全て「権

力「や「金」で、どこそこの領地に娘を嫁がせて協定結んだり、敵対関係である貴

族をたぶらかして自滅させようとしたり、欲まみれだ。こんな狭い汚い世界で生き

ていたアンジェラは本当に自分の命を賭してまで救いたいと思っていたのだらう

か。ひとり物思いに耽っているところに、突然声をかけられる。

「こんばんは」

会場の中央にいながらも、招待された貴族同士のやり取りを静観し、その渦中に

いるつもりがなかったために、一瞬反応が遅れる。何とか声のするほうへと振り

向きにこりと笑顔を返すと、ひらひらした服装のいかにも貴族しますとといった典

型的な貴族の男が立っていた。こんばんはって返していいのかな、それとも、ご

きげんよう？こういった場に不慣れな上に、まだ声をかけられると思っていなかつ

たソフィアーシュは軽く混乱状態に陥っていた。

「見たことない顔だな」

ソフィアー・ジュの笑顔に笑顔を返したこの男は、名乗れと言っている。今回の夜

会は、王族と少なからず血縁関係にある貴族だけが招かれおり、それに付随し

てここにいる貴族は皆権力がある。少なくとも貴族以外の招待客は元老院のおじ

い様方ぐらいだ。

「初めてお目にかかります、ソフィアー・ジュ・アルナートと申します。

以後お見知りおきを」

スカートの裾を持ち、背筋を伸ばしたままひざを軽く曲げて礼をする。

「アルナート？ああ、あの東のはずれにあるアルナート領のご息女か」

その台詞はそのまま「ああ、田舎貴族ね」と置き換えられる。居心地の悪さを感じ

ながらも、笑顔を崩さずに会話を続ける。

「はい。本来ならこのような場に招待される身ではないのですが、

今回は儀式の執行人として特別にご招待いただきました」

相変わらず名乗りすらない貴族との会話を早急に終えたくて、聞かれるだろう

内容を先に答えておく。

「はっ。なるほどね。王姫が臥せっているというのに、なぜ夜会が開催されるの

かと疑問に思っていたが、世界の柱の代わりに執行人のお披露目と
言うことか」

男はひとり納得して小ばかにしたようにソフィアージュを鼻で笑う。
しかし、その男

の様子よりもソフィアージュは”世界の柱の代わりに執行人のお披露目”という言

葉が頭に引っかかっていた。記憶が正しければ、アンジェラとその儀式に携わる

人のお披露目だったはず。また騙されたのか…。しかも、この状況だと好奇の視

線は独り占めですね。

「話を聞いているのか」

思考が内に向かっていているうちに男がさらに話を続けていたのだが、全く反応のな

いソフィアーヂュを訝しく思い声をかける。しかし、尚もその思考は内から外に向

かわず、結果的に男を無視をする形となる。そのことに腹を立て手を振り上げた

ところで、ソフィアーヂュはその失態に気づく。動きづらいドレスで咄嗟に避けるこ

とも叶わず思わず目を瞑るが、予期していた衝撃は訪れない。そのことを不審に

思い、恐る恐る瞼を開くとヴァンペールが背を向けて立っていた。その腕は振り

上げられた男の腕をしっかりと掴み、動きを静止させている。男がヴァンペール

の手を振り払いその腕を本来あるべき場所へと戻し、口が開いたところで場内が

ざわつき始める。招待客たちが向けているほうへと視線を巡らすとそこには、本

日の主役であるアルベルトがいた。先ほどまでソフィアーヂュに絡んでいた貴族

はそのことを確認するとそそくさとその場を離れ、アルベルトのいる壇上の近くへ

移動し始めた。そのことにほっと胸をなでおろし、役目とはいえ助けてくれたこと

に礼を言おうとヴァンペールに視線を移すが、ヴァンペールの視線は壇上に釘

付けになっている。それだけでも異常であるのに、周り人たちから何ともいえない

うっとりとしたため息がでてている。壇上に何かあるのだろうかと再びアルベルトの

いる方へと視線を向けるとそこのはいるはずのない金髪碧眼の美少女がいた。

えっ？アンジェラ様の身代わり？体調崩して欠席の予定じゃなかったの？また、

騙されたの？いや、それはないよな。現にヴァンペールは驚いていないじゃない

か。さすがに演技じゃないだろう。うん。アンジェラの身代わりに視線を送りなら、

ソフィアージュは大いに混乱していた。あそこにいるのは間違いなく身代わりだ。

身代わりの魔道具を作った本人しか見えない印がその美少女の頬についてい

る。確かに見た目はアンジェラ様だけど中身別人だし、魔道具外れるとすぐに効

果切れるし、元老院を黙らす以外は、あまり使用してほしくないんだけど……。何

を考えいるのだとアルベルトに視線を送ると兄譲りの本心が全く読めない笑みを

返された。水を打ったように静かな会場でアルベルトの招待客への挨拶が始ま

り、その後でアンジェラの紹介を始める。紹介されたアンジェラの身代わりは、優

雅な動きで礼をして簡素な自己紹介を述べる。その姿は、一枚の絵画を見てい

るような優美さで、本当に生きているのかと疑いたくなるほどだった。その後アル

ベルトによってまだアンジェラは本調子でないことが告げられ、アンジェラはその

まま会場を後にした。一通りの挨拶が終わると静まり返っていた会場に騒がしさ

が戻ってくる。それと同時に王太子であるアルベルトの回りに人だかりができ、

あつという間にその姿を目視することが不可能になる。その状況を大変だなあつ

と静観しながらも、後できっちりときのことについての話を聞こうと心に決め

、視線を壇上付近から外した。そういえばヴァンペールも話し聞いてなかったん

だよ。そのことを確認しようとヴァンペールがいる右後方に視線を移す途中で

いつの間にか右隣にいたご老体に話しかけられる。

「いやはや、王姫様は噂以上の美人でしたな」

ご老体はその長く伸びたあごひげをさすりながら言った。その顔には柔らかな笑み

が浮かんでいる。いきなりのことに少し驚きつつも笑顔で答える。

「はい。あまりにお綺麗で絵画を見ているのかと錯覚してしまいました」

その返答にふおっふおっふおっといかにも老人ですと言わんばかりの笑い声を上

げる。あまりに典型的過ぎてどことなく作られた印象を受ける。

「急に声をかけて失礼したね。わしは元老院の長で魔法協会の創始者、

ルヴォル・イテンブルクじゃ」

魔法協会とは、王や貴族とは別権力の組織でその名の通り魔法に関することを

管轄している。また、代々の世界の柱を管理し、守ってきている組織でもある。世

界の柱となるものの選定式もこの組織が行っており、人間界のエネルギーバーラン

スを保っているといっても過言ではない。でも、確か私の記憶が正しければ、

”魔法協会の創始者”って確か何千年と生きてるハーフエルフじゃなかったっ

け？しかもその見た目はせいぜい20代だった気がする。その割には魔力もそれ

なりだし、エルフ特有の気配もない。どういうことだろう？疑問を持ちつつも失礼

にならないように挨拶を返す。

「はじめまして。ソフィアー・ジュ・アルナートと申します。以後お見知りおきを」

スカートの裾を持って貴族式の礼をする。

「ああ、知っておるよ。そこにおるに騎士についてもな。

ときにブライトは息災なく暮らしているかの？」

視線をソフィアー・ジュの後方に移して、ルヴォルは眼を細める。おそらく、この騎

士の正体もばれているのだろう。まあ、ハーフェルフよりヴァンペールの魔力が

強いとは思えないし、当たり前と言えば当たり前だが、このおじいさんから人並み

以上の魔力を感じないほうが問題だね。どうでもいいけど全く予想していない

かった名前が出てきたなあ。知り合いだったのかな、お父さん。

「はい。父は元気にすごしております。父とはお知り合いなのですか？」

私の当然の質問に微笑を浮かべて答える。

「そうじゃな、大体13年前までは手紙のやり取りをしていたのじやが、あるときを

境にぱったり連絡が途絶えてのう。もともと煙たがられておったから、無視されて

るだけだろうとは思っていたが、予想通り元気でやっているようじやな」

”13年前まで”の辺りでその瞳がキラリッと光ったのはたぶん気のせいではない

だろう。何せ私が5歳の時にアルナート領に結界をはったのだから。そのときは

確かに、父にアルナート領に来る外部の人間について聞いたから、多分父が意

識的に外したのだろう。ん？待てよ。ということはその時点で父にばれてた可能

性があるんじゃないか？俄然、黙認説が有利になってきたなあ。内心の考え事は

とりあえず置いておくことにして話を続ける。

「そうだったのですか。家に戻ったときに父にお伝えしておきます」

「それにしても、お嬢さんも噂どおりの魔術師じゃな。あれはよくできておる」

ルヴォルは、壇上のアンジェラがいた場所にちらりと視線を移す。

「ありがとうございます。法則性さえ見つければ、誰にでもできることです」

確かに魔法陣は、適切な情報を入れなければいけないし、その情報は遺伝子に

組み込まれている直感的なものが多い。しかし、その情報もよくよく見ればそれ

なりに法則性があり、1と言う情報さえあれば、10にでも100にでもできる。問題

は0から1にするところであって、その部分はやはり遺伝子に組み込まれてる情

報を読み取るほかない。ただし、すでに定式化された魔法陣はかなりの数あり、

それを読み解きさえすれば、ある程度はできないことはない。身代わりの魔道具

などは、まさにその定式化された魔法陣によって作成できる。

「そうじゃな。でもそれは、わしのように永い時を生きること許された存在のみ

じゃ。例外はおらぬよ。人間の寿命じゃ一つの魔法陣を読み解くのが関の山じゃ

るうて」

優しげな表情を作り出ししているその銀の瞳は、私の忘れている”何か”を見つめ

ている。その”何か”がとても大切なことだった気がして落ち着かない。思い出し

たいのに、思い出せない。そわそわとしていたソフィアージュの気持ちは伝わっ

たのか、ルヴォルはゆっくり柔らかい声音で話をする。

「焦ることはあるまい。時がくれば次第にわかるようになるじやろう。今はその心

が感じているすべきことをしなさい」

言っている意味は全くわからなかったが、その言葉でそわそわと色めき立ってい

た気持ちに安心感に包まれて落ち着いていくのを感じた。

「どうぞやら時間のようじゃ。そろそろお暇するとしよう。ああ、これは独り言じゃが、

ヴァン坊やが望むように話をまとめてやるかの」

ルヴォルはそういうなりその場から離れ、会場からその姿を消したと、

同時にアルベルトが人を掻き分けてやってきた。ちょうどいいので、先ほどの真

意について聞こうと思ったが、一緒についてきた人ばかりを見てあきらめた。

アルベルトはその人だけにソフィアージュが儀式の執行人であることを紹介す

る。その後ソフィアージュは言うまでもなく様々な貴族に質問攻めにされ、その

質問攻めからの解放は夜会の終了を意味していた。

深紅の女騎士

窓から洩れる朝日の眩しさに目を覚ます。重苦しい体を起こし、寝ぼけた頭で、

今の状況を整理する。ヴェンペールに連れられて王城にきて、そのままアンジェ

ラの失踪騒ぎに巻き込まれ、そのままアンジェラの探索依頼を受けた。この事件

は、おそらく王族関係者にとって予想だにしないことだったのだろう。依頼を受け

てからの数日間は、搜索依頼をしたはずの私にアンジェラの身代わりを頼む始

末だったし、その上、面が割れると面倒だと言いながら、夜会に呼ばれるという

矛盾したこと内容を受けなきゃいけなかった。何だかなあ。事件の中心人物であ

るアンジェラよりも、その彼女に逃亡され、走り回ってる王族やその関係者の方

が何をしたいのか理解できない。純粹に家族を助けたい思ってるにしても、儀式

の生贄として連れ戻したいと考えているとしても、もっと自由に動けるように配慮

してくれるものじゃないだろうか。まあ、こういう上に立つ人たちには、下々の者には、

は想像もできない思惑とかがらみがあるんだろうけどね。そこまですべて考えて、ソ

ファイアージュは小さくため息をつく。滑らかな白い着心地の良い寝巻から動きや

すい格好に着替えようと備え付けのクローゼットを漁るが、ドレス以外の服が見

当たらない。今日は、おっさん騎士ことトーマスにお願いした”護身術”の訓練が

あるんだけどなあ。寝巻姿で困り果てていると朝食を持ってきた侍女が部屋に訪

ねてきた。ちようどいい、何かいい服を準備してもらおう。朝食を持ってた侍女に

スカートでない、動きやすい服を準備してもらえないかとお願いする。訝しげに表

情を浮かべ、「どういったご用途に使用なされるのですか?」と聞かれ、素直に

「護身術の訓練です」と言ってしまったから焦り、言葉を付け加える。

「ええっと、昨夜の夜会で顔が知れてしまったので、私のことを良く思われない人

から何らかの”歓迎”があつたときに身を守れるようにと思ひまして」

何とか誤魔化そうと話を付け加えたため、内容が薄く動機と呼べるほどのもので

はなくなっている。しかし、侍女は特に深く聞くこともなく「かしこまりました」とだけ

言つて下がつた。その表情は普段通り無機質なものだった。テーブルに準備され

た朝食をとるために席に着く。本来なら朝食中に甲斐甲斐しく世話をしてくれる侍

女や執事辺りがいるのが普通だが、貧乏な田舎貴族のソフィアージュにとつてそ

れは、”普通”ではなく、だいぶ前にご遠慮願つた。あまり侍女の仕事をとつてし

まうのも悪いとは思つが、落ち着かないのだ。考え事をしながらしていた食事を終

え、食器を片づけてもらうために呼び鈴を鳴らして侍女を呼ぶ。その度に、自分

で片付けたい衝動に駆られるが、ここでそんなこととしては侍女が途方に暮れるの

は目に見えているので我慢をする。片付けにやってきた侍女と一緒にいつも甲

斐甲斐しく身だしなみを整えてくれる侍女たちもやってきた。その手に持っている

服はいつものドレスではなかった。おそらく先程のお願いを聞いてくれた結果な

のだろうが、予想していた簡素なシャツにズボンではなく、どこからどうみてもこ

れから乗馬に出かけるお嬢様のような格好だった。その不満が顔に出ていた

のか、侍女の一人が「もうしわけありません。ドレス以外の服はこれしかございま

せん」と冷たい表情で形ばかりの謝罪を述べた。その表情に苦笑しつつ、「いえ、

これで十分です」とこちらも形ばかりの答えを返した。侍女たちが仕事を終え、そ

そくさと退出したのを確認し、席について迎えがやってくるのを待つ。午前中によ

こすとおっさん騎士は言っていたが具体的な時間は聞いてないので来るまでほ

んやりと待つほかなかった。一応、もうアンジェラ様の身代わりは終わったのだ

が、下手にうろついて迷うのも迷惑なので大人しく待つことにする。本日二度目

のため息をつき、ソフィアーヂュは昨夜の夜会での出来事を思い出す。元老院の

ルヴォルというおじいさんは、どう考えても私の知っているルヴォルではなかつ

た。私の記憶が正しければ、魔法協会の創設者であるルヴォルは、ハーフエル

フで20代前半の容姿をしている青年だったはず。白髪に銀の瞳をもった優しげな

青年、それがルヴォルだ。そこで、ふとソフィアーヂュは違和感に気付く。この18

年間で一度も会ったことのないはずのルヴォルの容姿とその身に纏う気配をなぜ

知っているのだろう。噂で知っているのだろうか、いやそれはないはずだ。ルヴオ

ルに関して耳にしたことのある噂は、容姿に関しては一切触れていない。では、

なぜこんなにも鮮明に彼の姿が浮かび上がるのだろう。父と知り合
いだと言って

いたから、幼いころに一度会っていたのか、それとも父に聞いてい
たのか。うー

ん。そうだとしても、生まれたときから26歳の精神でやってきた
私が、白髪に銀の

目を持つ印象的な青年を忘れるだろうか。延々と思考の渦にはまっ
ていたソフィ

アージュを現実世界へと戻す木を叩く無機質な音が聞こえ、続けざ
まに女性の

声がした。

「ソフィアージュ様、トーマスの命で迎えに上がりました」

「はい、今行きます」

席を立ち、戸を開けて声の主と対面する。

「お待ちしておりました。ご案内よろしくお願ひします」

軽くお辞儀をする。

「はい、あまり良いところではありませんが訓練所へのご案内します」

銀色の瞳を細め丁寧な口調でそう言うと、エイダはソフィアーージュを訓練所へと

案内した。エイダに訓練所に案内される途中少しばかり話をして分かったこと

は、今から行く訓練所は使用できる時間が部隊ごとに区切られており、あまり力

のない第5部隊はほとんど使用できないらしい。普段は適当な場所を見繕って訓

練してるらしい。

「さあ、着いたわあよ」

にこりとほほ笑むエイダの口調はいつの間にか敬語ではなくなっていた。

「ありがとうございます」

ぺこりとお礼を言って、その訓練所を見渡す。開けた場所で特に障害になりそう

なものではなく、部屋の隅に剣や盾などの武器を置いたためのおおきな”傘立て”みた

いなものがあるぐらいだ。匂いはまあ、汗と鉄と男の匂いというか、前世の世界に

当てはめると運動部特有のにおいに鉄の匂いを足した感じだ。

「女にとってはあまり良いところじゃないでしょ？」

うふふつと笑ってウインクをするエイダは、とても色っぽく美人だ。アンジェラも美

人だが、この人はそれとは違った方向で美人だ。何て言うか”妖艶”という言葉を

そのまま体現したような人である。

「そうかもしれませんがね」

女性にしては長身なエイダと視線を合わせて話そうとすると少しばかり首を上げ

ないといけない。

「おう、来たか。待ってたぞ」

不意に後方から声がして、振り向くとトーマスが立っていた。

「どこ行ってたのよ？」

「用を足しにな」

その返答に呆れたように「そう」っただけ言っただけでエイダは、そそくさと訓練所から出

て行くようにする。その様子にはトーマスは、少し焦りながらエイダを引き留める。

「おい、ちょっと待ってって」

引き留められたエイダは、盛大に顔を歪めて面倒くさそうに「何よ？」っただけ聞いた。

た。

「わりーんだけどよ、ソフィの稽古はお前がつけてくれ」

「はあ？あんたが引き受けたことでしょ？きちんと責任持ちなさいよ」

「いや、そうなんだけどよ…」

歯切れが悪いトーマスにエイダは焦れっただけでその続きを急がす。

「早く言いなさいよ。気持ち悪い」

「その、リカルドに…」

そこまで聞いて、エイダは「もういい、分かったわ」と無表情で承

諾し、「さつさと副

隊長の仕事を手伝ってきなさい」と呆れたように訓練所からトーマスを追い出し

た。「すまねえ」とだけ言ってトーマスは訓練所から出て行った。エイダとトーマス

の一連のやり取りから、何だか捨てられた子猫をどっちが育てるかもめてるよ

うな印象を受け、やっぱり無理に頼みすぎたのかなっとひとり落ち込む。

「それで、ソフィアーヂュは何の稽古をお願いしたの？」

トーマスを呆れ気味に追い出したエイダは、面倒くさそうにソフィアーヂュに尋ね

る。今し方、二人のやり取りに落ち込んでいたソフィアーヂュは、胸にズキリと鋭

い痛みが走るのを感じた。いや、うん、分かってはいたけどさ。この状況に悲しく

なりつつも、自分がトーマスをお願いしたことをかいつまんで説明する。

「なるほどねえ。確かに自分の身は自分で守れなきゃ、いざって時になにもできな

ものね」

どうやら話の概要は理解してくれたらしい。

「ところで、ソフィアージュ」

何やら考えていた様子だったエイダが不意に口を開く。その表情は、何か企んで

そんな嫌な感じの笑みが浮かんでいる。どうでもいいが最近、こういう人間（エル

フ含む）にばかり接している気がする。

「はい、何でしょうか？」

あまりその続きを聞きたくないが、無視できるわけもなくそのまま聞き返す。

「トーマスにとってその稽古をあなたにすることによる益は、何なのかしら？」

その言葉にはつとめる。確かにトーマスにとって私を訓練したところで何も良いこ

とはない。それどころか仕事が増えるだけで、マイナスにしかならない。俯き考え

込むソフィアージュを見て「やっぱりね」とエイダは呟いた。

「まあ、いいわ。あの調子だとトーマスは当分、あなたに稽古をつけることはでき

ないでしょうから」

冷めた表情で言葉を放つエイダ。

「えっ、それは困ります」

反射的に出てきた言葉に、内心焦りつつも放ってしまったものは仕方ないと覚悟

を決めて、食い下がることにする。

「そんなの私には関係ないわっと言いたいところだけど、一つ提案があるの」

エイダは先程の冷たい表情から一転し、とても楽しげに笑っている。

「何でしょうか？」

何だかとても嫌な予感がするが、どうしても稽古をつけてもらいたいソフィアー

ジユはその話を促す。

「あなたに稽古をつける代わりに、私の欲しいものを一つ頂戴」

言っていることはそれほど難しいことではない。ただエイダの欲し

いもの、それが

何かわからない。その上、エイダの纏う気配が人外じみている。でも、何とかかなり

そうな気がする。

「生命の危機を迎えるようなものでなくて、私に出来る限りのものなら」

一応、保険をかけておく。なんとなくだが、その雰囲気から魂を頂戴とか言われ

そうな気がするから。

「いいわ、それで。ソフィアージュにしかもらえないものだし」

うふふつと妖しげに嗤い、「美味しそう」と呟いたような気がするが気のせいであ

ることを切に願う。

「それじゃ、基礎的な稽古から始めましょう」

その様子は、先程の妖しい雰囲気から、部屋から訓練所へと連れて来てくれた

色っぽいお姉さんへと変貌していた。何とも言えない不信感を抱きながらも「よろ

しく願います」と口にした。

エイダは、午前中いっぱい使ってたっぷりと稽古をつけてくれた。まあ、稽古と

いっても受身の取り方や攻撃の避け方、不意打ちをとられた時の防御の仕方と

かそういった類のもので、決して自分から攻撃を仕掛けるようなものではない。た

だ頭で分かっているとも言われたとおりに動くのはなかなか難しいもので、基礎体

力も必要なので、明日からは体力づくりのために少し走りこみをすることになっ

た。そんでもって、稽古後に汗かいたから、シャワーで汗を流そうとエイダと共に

シャワー室に来ただけで、これはどういことなのだろうか。シャワー室には

シャワーが十数個あって、シャワーごとに各スペース区切られており、一人一つ

のシャワーが使用できるようになっている。で、そのシャワーをスペースには当然

一人しかいないはずなんだけど、何で眼前にナイスボディなエイダ

様が全裸で

立っているのでしょうか。ええっと、入ってきたときには確かにシャワー室には一

人しかいなくて、シャワーの蛇口ひねってお湯出したあたりでエイダも入ってき

て、声掛けられたから振り向いたらエイダが後方に立ってて、驚いてそのまま後

ろに退いたら一緒にエイダもその区切られたスペースに入ってきて、その両腕が

逃げられないように後ろの壁につけられた。うん、この流れなら確かにエイダは、

眼前にいることになるよね。なるけど、その理由がわからない。もしかしてニコの

シャワー以外壊れてるの？目の前でニコニコしてるエイダに混乱しながらも何と

か思ったことを口にする。

「ええっと、隣とか向かいのシャワーは壊れてるの？」

ちなみ敬語でないのは、稽古中に堅苦しいの嫌いだから普通に話してと言われ

たからで、混乱のあまり忘れたわけではない。

「どこのシャワーも壊れてないわよ」

相変わらずニコニコしてるけど、纏う雰囲気妖しい。

「じゃあ、何でここに来るの？」

この密着度に意味があると思えない。というか、意味を持たすような行為をしな

いでほしい。

「稽古の代わりに欲しいものくれるんでしょ？」

そう言って耳元に顔を近づけて「約束でしょ？」と艶っぽい声で囁かれる。ぞくりっ

と悪寒が走り、距離をとろうとするが既に壁にくっついていてその背をさらに後ろ

にのけぞることは不可能だ。

「確かに約束したけど、それはここじゃなきゃダメなの？」

濡れた深紅の髪が妙に色っぽく、そのしずくがエイダの柔らかい曲線をなぞるよ

うに流れている。女の私でも妙な色気にあてられそうだ。

「別に、ここでなくてもいいけど、部屋にきてくれるのかしら？」

それともソフィの部屋に入れてくれるの？」

この状況を打開できるならそれでもいいような気がするが、その提案に頭の中で

それは危ないと警報が鳴っている。どうすることもできずに俯いて考えていると

焦れたようにエイダが言葉を発する。

「あの約束は嘘だったの？」

「いえ」

反射的に答えたソフィアージュに満足そうに頬笑み、

「じゃあ、ここでもらうわね」

と言って妖しくわらい、それと共にエイダに纏う魔力の強さが跳ね上がる。その魔

力に本能的に、エイダが人でないことを悟ったソフィアージュは、咄嗟に小さな魔

法陣を描く。それと同時にエイダの体が向かいの壁まで吹っ飛ばす。予想以上の

威力に少し心配になるが、すぐに立ちあがるエイダに緩んだ気持ち

を引き締め

る。

「もっつ、痛いわね。やっぱり男の体の方がよかったかしら？」

そう言うなり、エイダの体が柔らかな女性のものから筋肉質な男性のものへと変

化していく。

「雌雄一体の魔族」

二人とも全裸で真剣に向き合ってる光景は何とも滑稽で笑いを誘うが、第3者が

いないこの状況でそれを気にする人はいない。

「そうだ、私には妖魔の血が半分流れてる。騎士はほとんど男だからな。

女体の方が何かと便利なんだ」

その言葉に何をされそうになったのかを理解し戦慄する。妖魔は、人と性交を行

うことによってその人の生氣、または、魔力を吸い取る魔族だ。最近は、人間界

に妖魔が来るものがなくなっていたから、とうの昔に滅んだ種族だ

と思っていたけ

ど、違うらしい。

「エイダの欲しいものって、私の生气だったわけだ」

自分でも驚くほど冷たい声音だ。

「お前に生气はないだろう。欲しかったのはその変わった力だ」

「生气がない？それはどういう意味？」

その質問にエイダは嘲笑う。

「そろそろ時間切れのようだ。約束はきちんと守ってもらおう」

そういなり、普通の”エイダ”にもどりシャワー室から出て行く。脱衣所の方でエ

イダと男の会話が聞こえ、その後男があわてて出て行く音が聞こえる。どうやら

他の部隊の騎士がシャワー室を利用しようとしたらしい。男女別でないこのシャ

ワー室で鉢合わせになったら、色々と恥ずかしいので、急いでシャワー室を出て

脱衣所で着替える。脱衣所を出ると赤い髪の女騎士が待っていた。無視をしよう

と前を通り過ぎようとしたときに腕を掴まれ、そのままキスをされる。後頭部を手

で押さえられ、離れようにも離れられない。必死に口を閉じて、こじ開けようとす

る舌を拒む。諦めた様にエイダはソフィアージュを解放して、満面の笑みで言っ

た。

「じちそうさまあ」

後ろ手にひらひらと手を揺らしその場を去っていくエイダに、脱力する。いつもな

ら恥ずかしさのあまり顔を赤くするところだが、少なからずその身に宿る生氣に

似た力を吸われたソフィアージュは、怒る気力も恥じる気力もなかった。脱力気

味に部屋に戻った後で、不意に男体になったエイダを思い出して一人悶絶し、

ベットの上で枕を叩く。思い切りたたいた枕は、羽毛の高級品だったが、そのあま

りの打撃に耐えられず、雪のように羽毛が部屋中を舞う。ひらひら

と舞う羽毛を

見つめながらソフィアージュは、思う。王城にいる人でまともな人はいないのだろ

うか。一般的にはその変人に自分も分類されていることを棚に上げて一人ごち

るのであった。

詰めが甘い

予想以上に疲れていたのか一通り悶絶した後、いつの間にか眠っていたらしい。

稽古が終わってそのままの格好で寝ていたため髪は乱れ服は皺だらけだ。その上、

眠る直前まで殴打していた枕から出てきた羽毛が部屋中に散らばっている。部

屋を片づけた方がいいよね。侍女を呼ぼうかと悩んだが、自分で散らかしたも

のを片付けてもらうのは忍びないので一人で片付けることにする。とりあえず、

ボサボサの髪を直し服に付着している羽毛を払うと、ふわふわと羽毛が床に落

ちる。床の羽毛をほうきで集めるために掃除用具を探すが見当たらない。よく

よく考えれば、そもそもそんなことするような人がいる部屋ではないのだから、

そんなものが置いてあるはずがない。掃除用具持ってきてもらうかな、でも、侍

女を呼んだら『私がやりますので、結構です』とか言われそうだな。顎に手を当

て唸り声をあげながら考え込む。ふと”荷物入れ”のことを思い出し、白い穴に

手を突っ込み真っ白な野球ボール程度の大きさの球体を取り出す。その球体には

うつすらと円が書いてありその部分を親指で押すと、散らばっていた羽毛がその

球体に次々と吸い込まれていく。あつという間に部屋が片付き満足気に頷いてい

ると、唐突に扉が開いた。そこには、すまなそうに頭を掻いているおっさん騎士

ことトーマスの姿があった。何の用かと尋ねたが、バツの悪そうな顔で頭を掻き

何か言いたげに口を開いては閉じてを繰り返している。このまま放っておいても

話が進みそうにないため、部屋の中に入るように促し席に着くように勧めたが、

立ったままでいいと断られたしまった。何か言いたげだが、相変わらず何も言わ

ずにパクパクと口を動かしているトーマスに痺れを切らすギリギリのところ、

トーマスが謝罪の言葉を口にした。

「すまないっ」

何に対して謝罪しているのだろうか？今朝、稽古の約束を果たせなかったことに對

してだろうか？いまいち状況が理解できないソフィアージュは、不思議そうに首を

かしげ、疑問符を頭に浮かべている。

「そのっ、悪かった。まさかエイダがお嬢ちゃんに手を出すとは思ってなくてよ」

「エイダが手を出すって…、シャワー室のこと知ってるのっ!」

トーマスの発言に思わず赤面し、思っていたことをそのまま口にしてしまう。その発

言にトーマスはさらに深刻な顔つきで謝罪を口にする。

「本当にすまなかった。俺が日頃からきちんとしてれば、お嬢ちゃんも生娘のまま

でいられたのに。詫びてすむ問題じゃねえのはわかっている。けど

…」

その後も延々とトーマスの謝罪が続いているのだが、あの出来事を当事者以外に知ら

れた恥ずかしさから、ほとんど頭に入ってこなかった。早急にその話を終わらせるた

めに、いつまでも謝っているトーマスにもう大丈夫だと伝え早々に話を打ち切ろうとした。

しかし、信じられないと言った風に何でも本当かと訪ねてきたトーマスに、少々のうつつ

うしささを感じつつ、全て肯定し何とか顔をあげてもらった。顔をあげたトーマスの眉はまだ

下がったままだ。

「…言いづらいんだが、もうひとつ謝らなきゃいけないことがある。何を言うつもりなのか特に予想できなかったので、深く考えずにそのまま発言を促

したが、そのあまりの内容に頭が理解することを拒否する。その内容を要約すると

『急な仕事が入って稽古をつけることができない。人を変えて稽古をつけることは

できるが、その人がエイダ以外に都合がつかない』

ということらしい。そのエイダが原因で色々あったのに、稽古続行するにはその渦

中の人に頼めど？頭の中では、『諦めてしまいたい。ここでトラブル増やしてどう

する？』という自分と『万が一に備えての稽古なのだから、続けるべきだ』という

葛藤が繰り広げられる。しかし、元来の一度始めたら最後までやりとおすと言う頑

固な性格から稽古を続行することをトーマスに伝え、今日のエイダの大まかな予定

を訊ねる。用件はこれで終わりらしく、最後に深く頭を下げて部屋を後にした。備

兵上がりで粗野な感じが強かったが、案外責任感の強い人なんだなあ。再び閉じら

れた戸を見つめながらソフィアージュは、これからのことに思考を巡らす。エイダ

に稽古をつけてもらうとして、その代価はどのようにして払うべきか。今日のよう

なことが毎回続いては、体が持たないし、いつ貞操を失ってもおかしくない。でも、

彼女が欲しいのは、私の”貞操”ではない。そこから得られる生命力や魔力だ。そ

うだとすれば、魔力の根源である血でもいいはず。むしろ性交から得られる体液よ

り凝縮された魔力が込められているはず。ただ、私は、魔力は皆無なんだよなあ。

一応、血から生命力も充分に取れるけど、妖魔にとってどれくらい摂取効率いいか

だよな。場合によってはかなりの量の血液を要求されるかもしれないし。その辺は

交渉次第か……。交渉は苦手なんだよね。不意に前世の恋人に弱音を吐いたときにの

励ましのセリフを思い出す。

『愚痴ろつが弱音を吐こうが、やらなきゃいけないのに変わりはないんだから、そ

のままその苦勞を糧にするつもりで行って来い』

スパルタで決して甘やかしてくれなかったが、世間知らずで撃たれ弱い自分をここ

まで強くしたのは、まぎれもなく前世の恋人だった。本当に出来な

いことに対して

はきちんと慰めてくれて、実は結構見えないところでフォローしてくれていたこと

に気付いたのは、かなり後だったけどね。ふと鏡を見ると先程までの深い眉間の皺

は綺麗に消え、下がっていた口角は、ほんの少しだけ上がっていた。

トーマスの話しによると本日のエイダの予定は城下町の身回りらしい。城内で耳

にした話しだとトーマスたちに部隊は基本的にはヴァンペールの指示に従って動く

特別部隊という話しだったはず。ヴァンペールは町民を大切にす
模範的な王族な

のだろうか？時々見せる感情のこもっていない笑みを見ると違うよ
うな気がする。

まあ、今はどうでもいいか。とりあえずエイダを探さないとね。そ
のためには変装

しないかね。先日の夜会で貴族だけとはいえばっちりお披露目され
たから、用心に

越したことはない。赤毛の肩より少し長い髪に茶色の髪、標準的な
町娘の容姿にス

カートといった感じに変装している。まあ、変装用の指輪着けてるだけで、髪や目

の色はもちろんのこと、服装も実際に来ているものとは違うんだけどね。それにし

てもどの時代も都会はすごいな。歩きやすく舗装された道に活気溢れる町民。のん

びりした田舎育ちには、この忙しさには慣れないな。田舎上がりの少女丸出しできよ

ろきよると視線を巡らせていると、町の身回りをしている兵を見つける。小走りで駆

け寄り話しかける。

「突然すみません。人を探しているのですが少しお時間をいただけませんか？」

話しかけられた身回り兵は、快く話を聞いてくれた。話しかけるまで気付かなかっ

たがどうやらもう一人身回り兵がいたらしい。二人の話によるとエイダは熊酒場と

いう酒場にいるらしい。二人に礼を言っつてその酒場へと向かう。実は話しかけると

きに少しばかり緊張していた。なぜなら、ああいう下っ端のくせに中途半端に権力

の笠を着た人間は、結構な確率で横暴だからだ。しかし、全然そんなことはなく、

頼んでもいないうちに酒場の地図を描いてくれた上に酒場はゴロツキが多いから――

緒に行こうかとまで尋ねてくれた。ちょっと疑っていた自分が恥ずかしい。

地図に従って酒場へと向かうと懐かしい文字を目の当たりにする。看板に下に熊

酒場と”日本語”で書いてあった。もちろんのこの世界に日本なんて存在しない。

驚きのあまり目を見開いて看板を凝視していたら、後ろから声をかけられる。

「嬢ちゃんもこの看板の文字が読めるのか」

後ろを振り返るとしゃがれた声の持ち主が歯を見せてにかつと笑う。

「あついえ、珍しい記号だったのでつい見入ってしまった」

咄嗟に出てきた嘘に「そうか」とだけ呟いて、男は酒場へと入って行った。その

姿を見送っていたソフィアージュもあわてて酒場に入っていく。その中は、木製の

机といすにカウンターらしきところに酒がズラリと並んで置かれており、何の変哲

もない至って普通の酒場だ。

「あら？ソフィじゃない。こんなところで何をしているのかしら？」

聞き覚えのある妙に艶のある声によって瞬間的に悪寒が走る。

「お仕事中に申し訳ありません。ご相談したいことがあります、お時間を頂けま

せんか？」

町娘の姿であることを念頭に置きつつ、細い綺麗な手に不釣り合いな大きなジヨツ

キへ一瞬だけ視線を巡らせ、丁寧に言葉を発する。

「そうねえ。でも、この場は乙女が語らうには場違いね。場所を変えましょうか」

燃えるような赤い唇を歪ませて頬笑むエイダと共に酒場を後にする。しばらく歩く

と街外れの森へと到着する。さらに少し歩いてところでエイダが振り向く。

「ここならいいでしょう。で、話って何かしら？」

人気のないところに連れてきたのだから、ある程度予想がついていそうなのに。

「今朝の稽古についてです。エイダの言つとおりトーマスは稽古をつけれそうに

ないので、エイダにお願いに来ました」

「そう。それで？」

敬語は堅苦しいから嫌だというエイダにあえて使うことで距離を置くが、余裕そう

な笑みが腹立つ。おそらくこの対応も分かっているに敢えて何も言わないのだ。

「稽古をつけて頂く代わりに、あなたが欲しいとおっしゃっていた”力”を対価として与えます」

この発言に対して不利なことを言われないように間髪いれずに話を進める。

「但し、その”力”は血によって与えることにします。性交またはそれを彷彿とさせ

る行為は一切いたしません。それ以外での行為であれば妥協します」
銀色の瞳を見据えて、その内に秘める思いを読みだそうとする。

「そうねえ、それをもらえるのはとても魅力的だけどちょっとつまらないわね。そ

れに性交を彷彿とさせる行為って主観的じゃないかしら？それって
どういう行為の

ことを示しているの？」

エイダは顎をあげ銀の瞳を細めて見下す。

「具体的にはキスや不必要な接触です」

「不必要な接触って？」

エイダはガラス細工のような繊細な指先でソフィアージュの唇をゆ
っくりとなぞる。

羽根がかすめるような感触にぞくぞくするが、微動だにせずエイダ
を半眼で睨む。

「このような接触です。この接触に何の意味があるんですか？」

「あら？ソフィアを動揺させるには十分な効果があるでしょう」

確定事項のように言うエイダに苛立ちが募るが、多少なりとも感情
に波を生み出し

ている原因であるのは確かだ。

「客観的に見て必要な行為には思えません」

「確かにそうね。でも、ソフィ」

ソフィアージュの言葉を肯定したかと思ったら、不意に耳元へと唇と近付けた。

「私があるから力をもらうためには、性的な興奮を伴った状態で体液をもらわなき

やいけないのよ」

ねっとりとした粘液が耳をなぞったのを感じ腕に力を入れてエイダを突き飛ばそうと

するがするりと避けられる。こけそうになるが何とか踏ん張って態勢を立て直し、エ

イダを視線で殺す勢いでねめつける。

「こういう行為が少しくらいないとあなたから血をもらってもどうしようもないの。

どうしても稽古をつけてほしかったら、承諾してもらえないといけないわ」

拳に力を入れ、精神的な凌辱に耐えながら承諾をする。

「わかりました。必要であるならば、そういう行為もありとします。但し、必要最低

限におさめてください」

唇に指をあて、んーっと考えるそぶりを見せていたエイダは、やがてにこりとほほ笑

み、「わかったわ」とだけ言った。その思わせぶりな笑みに不吉な予感を抱きつつも

その話はそこで終わった。

その後はスムーズに話が進み、明日からも稽古をつけてもらえるようになった。話

を終えてどのようにして、城まで戻ってきたのかは一切覚えていない。極度の緊張か

ら一気に解放されたせいで精魂尽き果ててしまった。だるい体を起こして何とか夕食

を摂り、さっさつと着替えてベットへと潜り込む。ふわふわの布団の中で心地よく眠

りにつこうとした瞬間、エイダの不吉な笑みを思い出し咄嗟にしくじったこと理解す

る。一回の稽古でどの程度の量の血を必要とするのかを話していな

い。その上、性的

興奮の度合いがその血の量と反比例している可能性がある。なぜなら、性的興奮が血

から”ちから”を摂取する効率であるとするならば、量が少なければ興奮の度合いが高

い必要がある。血の量で補うには限界があるのだ。自分の詰めのかさをここまで憎ん

だのは、これが初めてかもしれない。どうかこの仮定が外れていまずように。現実的

には何の解決にもならないがそう願わずにはいられなかった。ソフィアージュが今朝、

殴打した枕は中身の羽毛がほとんどなくなり、ただの布切れと化していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5525w/>

アルナートの魔女

2012年1月10日18時17分発行